

トレーナー辞めて結婚
します

オールF

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

働きたくない。しかし働かねば食っていけない……！ 親のスネをかじり続ける？
収入のいい女の子と結婚する？ そんなことよりいい仕事がある？ なるだけであ
とはパートナーにおまかせ？ そんなウマイ仕事がある訳……なかったので辞めて結
婚します。

*今作は『トレーナー辞めて婚活します』のリメイクとなります。

*おまけに言っておくとタイトル通りになるとは限りません。

目次

① トレーナー、辞めるってよ	1
② 俺はお兄ちゃんじゃねえ	17
③ 式場と産婦人科が決まったら連絡してやる	27
④ 名誉終身追っかけ厄介ヲタク	44
⑤ 友達の定義から教えてくれないかしら	55
⑥ 俺は次男だから	62
⑦ レクイエムには早すぎる	74
⑧ 俺の意思はダイヤモンドより硬い	87
EX トレーナールームと有象無象	
⑨ バカなりの意地	105
⑩ その選択を悔やまないために。	130
⑪ これは俺が始めた物語	141
⑫ トレーナー辞めて結婚できましたか？	152

①トレーナー、辞めるつてよ

トレーナーと呼ばれる仕事がある。

定義的には『競技の練習を指導し、競技者のコンディションを整える面を受け持つ』
と記されている。

幼少期から小学校まではなりたいものがあつた。野球選手に芸能人。幼稚園や小学校の卒業アルバムを見返せばキラキラしていた頃の俺がお出迎えというわけだ。

中学になつて、思春期特有の闇を抱えた俺だが他人を見て我が振りを見つめ直したおかげで黒歴史は少なくて済んだ。問題はその後だ。なんにでもなれると思つていた頃の夢は、努力してもなれるかわからず、なれてもその道で食つていけるか分からない。そう知つてからは特に目指すものもなく、行けそうな高校に入つて怠惰な日々を過ごしていた。

高校では、部活動はたった3ヶ月で退部して、高校生でもできるような人参の仕分けというバイトを淡々とこなしていた。そんな折にバイト先の社員さんに何になりたいかと問われた時、俺はこう答えた。

”働きたくない”

言ってから、人生舐めすぎかと口を噤んだが、1度出た言葉は引つ込まない。社員さんが突発性難聴になることを祈ったが、ばちこりと耳に届いており怒られるかなとヒヤヒヤしているとその人は笑った。

『だよなー、働きたくねえよな』

まさかの肯定。なんだやつぱりみんな働きたくないよなとウンウンと頷いていると、今度はそのためにはどうしたらいいかと聞かれた。無難に親のスネをかじり続けるとか、高収入の嫁を貰うとか答えてみたが、やはり現実性に欠けており、俺は人生そう上手くないかと肩を落とした。

『あるぞ。君が働かなくても、稼げる仕事がある』

それがトレーナーという仕事だ。就職率は低く、さらに結果を残せなければ収入はほぼゼロ。まさに実力主義の世界だ。確かにトレーナーがやるのはトレーニングメ

ニューを考えて、練習させて勝たせることで実際に稼いでくるのはトレーナーではなく、ウマ娘と呼ばれるヒトとは似て非なる存在だ。ウマ娘の成績が自分の査定と収入に直結するため、育てることになるウマ娘次第では何もしなくても稼げる。いわば博打だ。

天皇賞春秋連覇。トリプルティアラに秋三冠などと言った輝かしい記録を達成出来るウマ娘は社員さん曰く片手で足りるほどしかない。だが、実際に達成したウマ娘がいるのだから、不可能ではないと口角を上げる。

『トレーナーになるには実力がいるが……その後は運だ』

それにトレーナーは結構モテると聞いて、俺の中で興味が湧く。理由としては、現在ウマ娘の数に対してトレーナーの数は不足している。不足しているのは志願者がいないのではなく、なるための道が険しいからだそうだ。逆に、なることが出来ればそれだけで黄金のチケットを手にしたも当然らしい。

トウインクル・シリーズでの活躍を目指すウマ娘たちにとってトレーナーの存在は不可欠。トレーナーがどんなにダメ人間でも、ウマ娘は勝手に頑張つてレースで勝つてくる。勝てば報酬と名誉が得られる。負けてもウマ娘から首を言い渡されない限りは

勝ち組。切られても次に行けばいいと社員さんは一枚のチラシを俺にみせてきた。

『俺はなりたかったが、なれなかった。何故かって？ なりたいと思つた時には俺の時間は無くなつてた。だが、お前はどうか？』

この人は何者なんだ。どうして俺にそんなことを語る？ そんな疑問よりも俺は他の質問で頭がいっぱいだった。本当にトレーナーにさえなれば、何もなくてもいいのか？ いいウマ娘を見つくれるだけで俺は金を稼げるのかと。

『ああ、トレーナーにさえなればな』

この言葉を聞いて、俺はチラシを奪い取つた。トレーナーになるための専門学校。合格率は低く、さらには卒業できてもトレーナーになれるという保証はない。だが、なれたやつがいるのだから、俺になれないという道理はない。レースと違って勝者は一人と決まつていない。トレーナーになるための条件を満たせば誰でもなれる。

楽して稼ぐため、いや働かずして稼ぐための投資と考えれば、安いものだ。残りの学生生活をトレーナーになるために捧げるにはな。

そして、俺は――

###

「辞めます。俺」

日本ウマ娘トレーニングセンター学園、略してトレセン学園の理事長室で”退職願”と書いた封筒を叩きつけた俺はそう述べた。

「……？ 質問ッ！ ……どういふことだ？」

「えつと、これは……？」

目の前にはちっこいくせにこの学園の理事長を務める秋川やよいと秘書である駿川たづなさんがいて、俺の言葉を聞いて疑問の表情を浮かべる。

なるほど、言葉が足りなかったかと俺は言葉を付け足した。

「辞表です」

「それは分かります！」

「不可解ッ!!! どうしてこうなった!?!」

驚く2人に対して俺は2週間目のセミの表情だ。いや、あいつらにも表情なんてものがあるのかは定かではないが。要するに死にかけてというのが伝わればそれでいい。

「いや、そのもうキツイんですよね」

トレーナーになることができて、あとは俺が何もしなくてもいいウマ娘を見つけるだけってことでトレーナーになったのに、トレーナーさんやること多すぎない？ 練習場の確保に、レースの予約。機材のメンテナンス手配に祝勝会の日取りに幹事。担当ウマ娘のご機嫌取りにやたらと揺れるUFOキャッチャー。あと何やったっけな。

働かずに得る金は素晴らしいが、想定以上に働くことになって俺の身体はボロボロだ。勤続6年目にして橘さんも雪上で蹲るのもわかるマンになった。薄々勘づいてはいたが、これも美味しい飯のため、いいベッドのためと考えていたが、トレセン学園に設けられた仮眠室以外で寝た記憶が少ない。この前なんて、飲み会帰りに酔って自宅ではなく仮眠室に帰ってしまった。ああ、俺の理想郷を忘れるとは哀れな僕。

ということ、これ以上は限界だ。担当たちには悪いが、心療内科に通う前に早く辞めたい。辞めて択捉島にでも移住しようかと思う。あそこなら競バ場もないだろうし。

「説明ッ！ 理由は!？」

「給料に見合った仕事……ですかねえ……」

「そののなにいけないッ!？」

理事長のおっしゃる通りだ。働きに見合った給料がもらえる。世間一般的には素晴らしいことなんだろう。有給休暇も担当ウマ娘の大切なレースが控えてなければ受理されるし、天皇賞に優勝すればボーナスが出る。しなくても出るけど。福利厚生も手厚

く、社会保険も充実している。周りに比べればとてもいい職場だ。でも、俺働きたくなくてここに来たんだよね。働いて給料もらってたら本末転倒なんだよね……。

「ほ、ほか！ 他の理由は!？」

「そ、そうだ！ 体調が悪いのか!？」

「ああ……健康診断はオールAでしたねえ……」

ウマ娘の生活に合わせてたら、いつの間にかねえ。23時には眠くなる身体にされちった。食事もトレセン学園の栄養豊富な定食ばっかだし、ウマ娘のトレーニングに付き合わされて身体は引き締まっちゃって。ダンスと歌まで上手くなっちゃって……今なら合コンとか行けばKINGになれちゃうよ。顔はともかくとして、金はあるし、身体も健康そのもの。でも、男は面白さと優しさらしいから無理だわ。お疲れ様でした。

「何故落ち込んでいるッ!？」

脳内でお前に負けるなら悔いはないさしているのが顔に出ていたらしい。

「せ、精神的な疾患か何かですか……？」

「だと良かったんですけどね」

別に寝れないとか、悪夢を見るとか、身体がだるいとかはないんですよ。健康的な生活をしているので。ただ、働いているとどうして働いているんだろって考えちゃって病むことはあるけど、夜しっかり寝たらしばらく考えないし。

そしたら、またそのタイミングが来るまで働き続けちゃうし、それまで健康かも分からないから。

「結婚、しようと思うんです」

「えっ!？」

「唐突ッ!？」

「俺より収入のいい人と結婚します」

「何故エツ!？」

「……俺が働かなくて済むじゃないですか」

「ツ……!!? ま、まさか、トレーナーの仕事が苦痛だと言うのか……!!」

いや、それはない。働いた分だけ給料が出るよりも、俺が働いた分だけウマ娘も頑張ってくれるやつを見るのは嬉しいし、結果も出してくれると尚のこと良い。もちろん、負けた時は悲しいけど、それを分かち合えるのはいい事だと思うし、分かち合えるからこそ次は負けないようにって思える。だから、働くのは苦痛に思ってもトレーナーという仕事を嫌ったことはない。やることが多くて辞易したのは嘘じゃないです。仕事した分の対価が支払われているのは喜ばしいことだ。

それはそれとして。

「そうじゃないんですけど、とりあえず働きたくないんですよ」

「ええ〜つと……つまり、そのどういうことですか？」

「辞めたい。結婚したい」

額を抑えながら訊いてきたたづなさんだが、俺の言葉でより頭痛が酷くなったのか眉間にシワが寄っていた。ううむ、眉間にシワが寄っていてもやはり可愛いな。

「そういえば、たづなさんって収入どれくらいなんですか？」

「私ですか……？ 私は……って遠回しなプロポーズですか!? ごめんなさい、そういうのはもつと時間をかけて、最高のタイミングでお願いします！」

早口で何言ってるのわかんなかった……。でも謝られたからなんか振られたっぽいな。収入聞いただけなのに。

「じゃあ、理事長は？」

「不快ッ！ ついでのように訊くな！」

「ええ……」

年齢を聞くのは失礼と聞いた事はあるが、収入を聞くもダメなのか。2人の場合は「やだ、私の収入低すぎ……？」ってことはないだろうに。あわよくば養ってもらおうと思っただがダメらしい。2人とも可愛いし仲良いと思ってたから、俺と因子継承して欲しかったのに。うわなにこれキモすぎ死のう。

「死にたくなつたので帰ります」

「本当に何故ッ!？」

「えっ、あ、あの、し、死なないでくださいいね！」

辞めるということは一応伝えまし、辞表も出したから辞めさせて貰えるだろう。辞めるのと死ぬのどちらが早いかリアルタイムアタックしようと思っただけ、たづなさんに死んで欲しくないって言われたし、頑張つて生きよう。

###

「り、理事長どうするんですか……？」

「無論ッ！ 拒否だ拒否……今、彼に抜けられたら困る」

自殺をほのめかす発言してトレーナーが去っていった後、やよいとたづなは彼の置いていった辞表を見つめながら、神妙な面持ちで口を開く。

「そもそも、結婚したいから辞めるといのがわからん！ 辞めなくても結婚はできるだろう！」

今ではマッチングアプリだとか、〇〇婚だとか、色々あるからトレーナーをやりながらでも結婚できるはずだと思ったやよい。引き止められるのならば自分がしてもいいとも考えていた。

「想定ッ！ 私と彼が結婚すれば……！」

瞬間、やよいの脳内に溢れ出した彼との結婚生活。

やよい〜！ 今日もうまびよいしてきたぜ〜！

流石ッ！ 私の旦那だ！

馬鹿野郎ッ！ 俺が真にうまびよいするのはお前だけだッ！

ッ……！ 羞恥ッ！ だが……歓迎ッ！

「……ッ！ 理事長ッ！ 大丈夫ですか!？」

「ハッ！ す、すまない……恥ずかしいところを……！」

URAFアインナルズで上位入賞したウマ娘だけが歌うことを許されるうまぴよい伝説を使ってあんな想像を……後ろめたいと同時にこの発想に至ったやよいは顔を朱に染める。

「理事長と彼が結婚してしまうと、学園運営とウマ娘の育成に支障が出ます。なので、ここは私が……！」

瞬間、たづなの脳内に溢れ出した彼との結婚生活！

あら、あなたおかえりなさい。

ただいまたづな。

今日はお風呂にしますか？ ご飯にしますか？ それとも……？

決まっているだろう！ 勝利の女神はお前だけだ！

「……なっ！ たづな……！ たづなッ！」

「……ッ！ わ、私は何を……！」

理事長に呼びかけられなければあのままどうなっていたか……想像するだけで顔から火が出そうになるたづなは顔を手で覆った。

変な妄想に走りはしたが、2人の考えは一致していた。彼を辞めさせないためにも、学園に所属しているうちに結婚する。その相手が誰かというのは彼女たちの中では互いに決まっていた。

②俺はお兄ちゃんじゃねえ

トレセン学園は日本でも有数のウマ娘育成学園として数えられるだけあって、学園内の設備が豊富だ。豊富すぎて迷子になりそうになることもあったが、6年もいればそんなことは無い。僕ちんこんなところに6年もいたの……？

練習施設完備、図書館やデータをまとめるためとコンピュータールーム、視聴覚室に、室内にある温水プール、やたらとでかい体育館に食堂、ウマ娘たち専用の寮とトレセン学園の施設は豊潤だ！

ウマ娘育成学園のため、ウマ娘のための施設に目がいきがちだが一応、我らトレーナーのための施設もある。そのひとつが仮眠室だ。冷暖房完備で組み立て式の転むベッドと手厚い待遇である。さらに申請すれば寮にも入れてくれる。しかし、業務に必要だからとサウナルームを設置するほどのスペースはないので、賃貸へと移ったのだが最近帰った記憶が正月くらいしかない。引き払った方が吉なのかもしれない。

理事長とたづなさんに辞表を提出した次はウマ娘達への報告だ。彼女達も頑張っていたが、その分俺も頑張ったしもうゴールしてもいいよね？ あいつらならきつと分

かってくれるさと俺はグラウンドへと出る。すると、俺を見つめるなり駆け出してくるウマ娘が1人。最初はアイツに報告するかと俺も足を動かした。

「お兄ちゃん！ おそーい！」

「俺はお前のお兄ちゃんじゃねえ」

「えー、またそんなこと言う」

俺の事を兄と呼ぶウマ娘、トレセン学園ではこの子以外にももう1人いるが俺の担当ではたった1人。SNSで輩に絡まれても、ガイドラインに沿って排除する系ウマ娘にして、俺を兄呼ばわりして犯罪者に仕立てあげようとしてくるのがカレンチャンである。

シヨートボブのクリーム色の髪に、SNSでもバズるウマ娘カーストの上位に位置すると俺が勝手に思い込むほどに顔のいいウマ娘だ。しかし、そんなウマ娘も俺の前では普通の女の子だ。

「もしかして、もう妹として見られないとか？ きゃー！」

「はいはい、もうそれでいいよ……」

なにがきゃーだよ。もう妹として見られないとか、その先は地獄だぞ。両親に引き裂かれて兄貴の方が復讐するんでしょ？ 俺は詳しいんだ。

「そんなことよりカレン、お前に伝えなければならぬことがある」

「え？ なになに？ もしかしてシーチーちゃんと一緒に撮影会とか？」

そいつは魅力的な話だな。だが違うんだ。

「俺、トレーナー辞めるんだ」

「エイプリルフルはもう終わったよ、お兄ちゃん」

嘘じゃないんだ、ほんとだよ？ エイプリルフルに嘘つきまくったから信じられないのかもしれないけど。本当なんだ。

「俺ちゃん、もう疲れたからトレーナー辞めるんだ」

「……？ 疲れてる人は夏合宿であんなにはしやがないと思うけど？」

確かにウマ娘よりはしやぎましたよ？ だって夏合宿は俺何もしなくていいもん。レースに出ない限りは、俺もフリーだし。年に数回の羽根を伸ばせる機会だぜ？ 伸ばさなきゃ損でしょ。

「それに……すぐに他所の女の子に声をかけるし……」

膨れっ面で自身の胸を押さえながら、俺を睨んでくるカレンに目を逸らしてしまう。仕方ないじゃないか。万乳引力の法則だ。人はでかい音とかでかいものに目が引き寄せられるんだから。でも、カレンはまだ成長期だし、可能性あると思うよ、うん。

「俺、結婚したいんだ」

女の子に闇雲に声をかけてるわけじゃないんだ。将来有望で俺より稼ぎがありそうな女の子をこの28年間鍛え上げた眼で見ただけなんだ。決して胸だけを見ていたわけじゃない。水着のデザインとか太ももとか脇、あとは尻も見てた。

とにかく、俺が女の子を視姦していたのはやましい気持ちじゃなくて純粹に結婚したいからなんだぜという意味を込めて言うと、途端にカレンからの視線が熱くなる。

「えっ!? その、き、急に言われても……」

「まあ、困るよな。けど、決めたことなんだ」

「カ、カレンの気持ちは……聞いて、くれないの?」

「ああ。受け入れてくれ」

カレンは俺の事を慕ってくれているように思う。そんな女の子に結婚したいから辞

めるだなんて最低だと思うけど、思い立った時に行動しないとダメだってことは嫌という程知っているから。

「うん、分かった。お兄ちゃんがそう言うなら……いいよ」

「ありがとう、カレン」

後任は信用も信頼もできて、俺より働きたいってやつに任せるからと言おうとして、そういえば後任決めてなかったなと気付く。理事長やたづなさんが用意してくれるのなら、助かるけどあの感じだとそこまではしてくれ無さそうだ。

「じゃあ、これからはお兄ちゃんって呼べなくなっちゃうね」

「俺はその方が助かるけどな」

職質かけられなくて済むしな。ワッハッハーと笑みがこぼれる。

「もうっ！」

「あいつたあ……」

愛バからの愛のある殴打が肩へと突き刺さるも、加減はされていて痛みは感じない。けれど、この子なりの激励か、あるいは哀しみの表れなのかは分からない。でも、確かに心に感じた痛みだけは本物だった。

お前の不幸は俺に勝てると思わせたことだと勝手なことを思いながら、カレンを練習へと送り出すと、俺は他の担当へと話を伝えるべくグラウンドから離れた。

とりあえず、これでカレンへの報告は完了だ。

###

カレンチャンは芝の短距離を得意とするウマ娘で、とつてもおしやまなイマドキの女の子。無邪気で気分屋だが、おだてられてやる気になれば信じられない実力を発揮する点が今のトレーナーとは非常に噛み合っていた。おだてればやる気になる性質はトレーナーも同様であつたので、何を言えばやる気になるかを彼は知っていたのだ。

しかし、そのせいで彼がより激務になってしまふ。ウマスタグラム、ウマッターなどに投稿する際に写真を撮るのはトレーナーの仕事になるだけならまだしも、新しい服の意見役や他の可愛い系ウマ娘への対抗策を講じさせられるなど「俺はマネージャーかプロデューサーにでもなったのか？」と呟いていた。

そのおかげでカレンチャンのやる気は落ちることなく、出走した短距離レースでは無敵とまで言わしめるほどになっていた。サマースプリントシリーズは彼女の独壇場となり、レース後に行われるウイニングライブでは勝利の喜びと可愛さを全開にできる場ということもあって大いに楽しんでいた。

それもお兄ちゃんと慕うトレーナーのおかげだったのだが、カレンチャンは彼が去った後のグラウンドで両頬に手を添えてため息をついていた。いつもは元気で可愛いカレンの物憂げな表情に誰もが首を傾げた。

「お兄ちゃん……唐突すぎるよ……」

トレーナーから告げられた辞めるといふ言葉と、結婚したいという言葉。カレンはそれを「ここを辞めて、カレンと結婚したい」と受け取っていた。固い意思のトレーナーに、カレンは戸惑うも彼がそこまで言うならと了承した。

「パパもママも許してくれるかな……？」

さすがに卒業してからになると思うし、お兄ちゃんもそれまで待てるかなと不安になったカレンだが、それよりも先に父と母の説得の方が先決ではないかと思ひ悩む。基本的にヘラヘラしてて、都合が悪くなれば幼児退行して逃げる男だ。両親へ挨拶に行こうと言つても仮眠室に引きこもるに決まっている。そしたら、また自分か誰かが引つ張り出さないといけなくなるのだらうと、昔のことを思い出すと自然と笑みを零れた。

「あれじゃどつちが上かわからなくなるよ」

もう仕方ないなと顔を上げたカレンはその時はその時だと、今は来年のサマースプリントシリーズも勝てるように努力を続ける。あそこで見た最高の景色を再び目に焼きつけるために。そして、最前列で見えてくれる人のために。

と、練習を再開した時にふとおかしなことに気付く。

「あれ？ お兄ちゃん、カレンが卒業する前に辞めちゃうの……？」

トレーナー曰く辞めるのと結婚したいのはセットだったが、カレンはまだ中等部で法律的に結婚出来る年齢に達していない。カレンが卒業するまで待つという発言はなかった。つまりそういうことである。

笑顔からまたしても暗い表情へと変わったカレンは練習を中断し、トレーナーが去っていった方向へと目を向けた。

「……お兄ちゃんは私だけのお兄ちゃんなんだから」

カレンはそう呟くとグラウンドから離れていく。その後ろ姿を見ていた相部屋のウマ娘は、夜は話しかけない方がいいなと心の中で思ったという。

③式場と産婦人科が決まったら連絡してやる

トレセン学園には様々な異名やら称号を持ったウマ娘が多く在籍している。漆黒の追跡者とか皇帝とか帝王とか。赤い彗星に白い流星、最後の2つは居ないけど、大抵のウマ娘は名前やその功績から尊敬と畏怖の念を込めて2つ名のようなものが付けられている。

俺の担当するウマ娘の1人、エアグルーヴもまた「女帝」と呼ばれ、容姿端麗、学業優秀、何でも完璧にこなす才媛つてのはまさしく高嶺の華だ。もしも、同期か先輩にいたら求婚してるところだが、残念なことに俺よりも歳下でしかも教え子の立ち位置になる。けど、ほとんど教えてないので、俺ちゃん必要なのかしらと疑っちゃう。

だから、こいつに関しては俺が辞めると告げても「やっとか」「みたいな反応をされると思うので、まだ気が楽である。トレーナーがいなくても勝手に練習をするようなウマ娘だし、俺がない方がアイツもやりやすくなるだろう。

エアグルーヴはトレセン学園の生徒会役員であり、シンボリドルフ会長を支える副会長だ。そのため、彼女がグラウンドや練習施設にいないとなると必然的に生徒会室にいる可能性が高い。

「お前はエアグルーヴの」

「あー、ナリタ……なんだっけ？」

「ブライアンだ。いい加減に覚えろ」

生徒会室へと向かう途中で、鼻腔テープをつけた黒いポニーテールのウマ娘と出会う。担当以外のウマ娘の名前は曖昧だし、なんなら似たような名前が多くてこんがらがってしまう。その事でナリタブライアンに冷たい視線を向けられるが、俺がここにいる理由を察したのか彼女は後方へと目を向けた。

「アイツならまだ生徒会室にいたぞ」

「サンキュー」

訊かなくても答えてくれるとか社会適合者か？ 訊かれたことすら答えないことが

あることに定評のある俺が通りますよと。てか、この子は一体どこへ行くのやら。まあ、知ったことじゃないからいいけど。

「どうどう」

生徒会室の前に着き、ドアをノックすると会長であるなんたらルドルフの声が返ってくる。俺はできた人間だからちゃんと返事があるまでドアを開けたりはしないんだ。

「なんだ貴様か」

入ると直ぐに興味なさげに視線を向けてきたのは、当然のごとくエアグルーヴだ。

「何の用だ。今日の練習は17時からだと伝えたはずだが」

「そうだったけ？」

俺が聞き返すと目力が強くなる。美人に睨まれるとシンプルに怖いんだよな。一昨

日くらいに練習場は予約しているから心配すんなー☆とウインクすると、ため息をつかれた。いつも通りなことなので、慣れたものだが、はじめの頃はよく引かれて侮蔑の視線を……つてそれは今もでした。

「ふふっ、相変わらず仲がいいな」

「そんなことはありません」

笑う会長に即座に否定したエアグルーヴは、俺へと視線を戻した。

「それで本当に何の用だ。いつもはメッセージで済ませてくるクセに」

「あー、口頭じゃなくてもいいかなとは思ってたんだけど、後でまくし立てられても困るから」

「………どういうことだ？」

生徒会運営に後輩の指導と、俺と違って働きのエアグルーヴは基本的に自分のためではなく誰かのために時間を使う。それは自分のレースよりも優先されることで、珍しいやつもいるんだなと思った。しかも、彼女が必要だと思うことをレースで勝つためには無駄だと言うトレーナー達は悉く切り捨てられていた。だからこそ怠け者の俺とは相性が良かったのだろう。最低限のトレーニングメニューを送り付けたらオワオワリ！ 他にやりたいことがありや勝手にどうぞとじていたら、過干渉してこない俺のことが気に入ったというよりは、彼女にとつても都合が良かったのだろう。

俺はエアグルーヴがやりたいことをするためのトレーナーとして、練習場やレースの予約はしてやった。たまにカフェやレストランの付き添いを頼まれて、行ってやったこともある。後輩と行くため、会長を招待するためとか理由は様々だったが、仕事ではなかったしそれくらいならと引き受けた覚えがある。結局行ったのかは知らねえけど。

「おい、聞いているのか」

「ああ、来た理由だっけ……？」

そうやって会長の方をちらりと見やる。まあ、遅かれ早かれ彼女の耳には入りそうだ

し、聞かれてても問題は無いだろうが、一応な。

「ふむ、邪魔なら少し出るが」

「いえ、私たちが」

「会長さんが良ければ別に聞いてくれてもいい」

大した話でもないし、理事長やたづなさんに話した時点で生徒会長の耳にも入るのは必然だからな。それに座っているウマ娘に行かせるのも気が引ける。

「俺、トレーナー辞めるんだわ」

「……はあ、またその冗談か」

「いや、今度は嘘じゃないっす」

確かエアグルーヴにめちやくちや怒られた時に口走った気がする。だってあの時のアイツめちやくちや怖かったんだもん……。昔のことを思い出して俺が怯えていると会長が口を開いた。

「正気かい？ 本当ならば理由はなんなんだ？」

「結婚です」

言うのと2人は互いに目を合わせて、再び俺へと視線やるとまた目を合わせた。なんなの？ 目と目で通じ合うの？

「ふむ、それはつまり……その、なんだ。結婚するから辞めるということか？」

「そういうことだな」

思いのほか状況の飲み込めていないエアグルーヴに代わり、会長が俺へ確認するように尋ねてくる。

「ちなみにだが、相手は誰なんだ？」

「相手？」

「ああ。結婚するというのならば相手がいるのは至極当然。差し支えないなら聞いておきたい」

君とは知らない仲でもないのだからと語る会長に俺は頭を抱えそうになった。いや、結婚したいから辞めるんですけどとはとても言えない。トレセン学園の生徒会ツートップ。頭は回るし、俺が結婚相手を見つけてないことがバレれば、正論のナイフで滅多刺しにされるのは目に見えている。

「……私にも、聞かせてもらおうか」

「ヒエツ」

なんでちよつと怒ってんだよ。エアグルーヴ的には無能なトレーナーがいなくてラッキーじゃないのん？ いや、もしかしたら電話やメッセーजीつで飛んでくる都合のいい男がいなくなることを危惧して!? どちらにせよ俺への評価が低いのは変わらねえじゃん。

あるいは、俺と結婚する奇特な女性について興味があるのか。そして、俺から名前と住所を聞き出して俺の危険性を暴露して破局に追い込もうって魂胆か。先行と差しのクセにい！

「……そこはまあ、また今度正式な発表をもつて、ご報告とさせていただきます」

「は?」

「ヒイツ」

「言えないのか? 何故だ? 言ってみろ」

鬼舞辻エアグルーヴ様、おやめください。わたくし、死んでしまいます! ジリジリ

と詰めて来て、圧迫面接みたいに壁ドンするのはやめてください。圧迫面接で壁ドンはしないわ。

「いや、その、相手に了承を……」

「取っていない？　そもそも、結婚するだけならトレーナーを辞めなくてもいいだろう。トレーナーでもない貴様になんの価値がある？」

「あ、ありますよ……ありますあります……（超小声）」

「例えば？」

ええつと……ジョークに富んでいるとか、ユーモラスに溢れている。比類出来ないほどのクズさ。腐ったにんじんよりも性根が腐っていると。あとは死なずに生きてるとか、6年は働いたこととか……。ダメだ俺のセールスポイントがありふれすぎている。希少性と社会的に宜しくない方向に。トレーナーじゃない俺の価値とか一番知りてえわと思っていると、目の前のエアグルーヴがより迫ってくる。

「ないんだろう。だから、結婚なんてジョークを言うのは」

瞬間、俺の意識は事切れた。というか、よく分からなくなった。

「うるさい！ 黙れ黙れ！ キミみたいな胸も態度もデカい女じゃなくて！ ボクのことをトロットロに甘やかしてくれる女の子と結婚するんだ！ 要領も頭も顔も身体もいいからって調子に乗るなよ!!」

「け、貶すのか、褒めるのかどっちかにしろ！」

「知るかー！ ボクはもう帰る！ 結婚するって言ったらするんだ！ 結婚してボクは働かずに暮らすんだ！ 式場と産婦人科が決まったら連絡してやるからな覚悟しておけ！」

早口でまくし立てて、エアグルーヴを逆に壁ドンしてやると、彼女は押し黙る。そして、部屋から出る前にボクとエアグルーヴのやり取りを呆然と見ていた会長へと頭を下

げる。

「お騒がせしてすみませんでしたあっ!!」

今日はもう疲れた。ほかのウマ娘への連絡は明日にしよう。うん。

###

言いたいことだけを言って出ていった男の姿が無くなってから、数分経ってシンボリルドルフはこめかみを押さえていた手を離すと、副会長の方を見た。

「……大丈夫か？」

「……えっ？ ええ、はい……私は、大丈夫です」

確かに見た様子はいつも通りのエアグルーヴだが、やや放心状態のように思える。シンボリルドルフは紅茶をいれに席を離れる。彼女が戻ってくるまでエアグルーヴは

ずっと立ち尽くしたままであった。

「エアグルーヴ、紅茶をいれたんだが」

「……ああ、ありがとう、ごさいます。いただきます」

言うエアグルーヴはソファへと腰掛けると、カップを持ち上げて紅茶を一口喉へと通す。飲み物が入ってやや落ち着いたエアグルーヴは会長へと頭を下げるとカップを机へと置いた。

「すみません。私のトレーナーが」

「いや、彼の奇行は聞き及んでいた」

しかし、実際に目の当たりにすると凄いなとシンボリドルフは内心かなり驚いていた。幼稚地味な口調ではあったが、あのエアグルーヴを気迫で押し切るとは。やはり只者ではないと頷いた。

「それで、彼のアレは本気だと思うか？」

「……分かりません。いつもの事のようにも思えますが」

辞めるとは何度か聞いたことがあるがその度に駄々をこねても説教をしてきた。先程の幼児退行も見慣れていたが、今回は雰囲気違ったとエアグルーヴはため息をつく。

「結婚したいからと明確な理由を言ったのは初めてだったので、おそらく本気、かと」

本当に辞めるとなれば辞表が理事長の手元に届いているだろう。真実かどうかは確かめればすぐに分かることだ。流石に口だけで辞めると言っただけで去るほど腐ってはいない……と思いたいルドルフとエアグルーヴは眉間に皺を寄せた。

「まあ、結婚理由も大概だが、君への言葉も……」

エアグルーヴの言う通り貶しているのか褒めているのか分からなくなる言い方だった。あのトレーナーは幼児退行した分、思っていることが素直に出るらしい。

「……っ。か、からかわないでください」

「すまない。そんなつもりはなかったんだが」

エアグルーヴはトレーナーに自分の要領の良さ、頭や顔、身体を褒められたのは初めてで、しかもそんなふうにいると知り、嬉しくはないが不快でもないというやや不安定な気持ちで湧き上がっていた。おまけに辞めたいと言いつつもやれと言えば大抵の事はやるし、電話やメッセージですぐに飛んでくる彼は、今まで出会ったどのトレーナーよりも自分に合っていると感じていた。変にアドバイスや口出しはしてこないし、生徒会活動や後輩育成に異を唱えたこともない。人間性は難があるがトレーナーとしては悪くないという評価がエアグルーヴの下した第一印象であった。練習メニューにも無駄がなく、練習場やレースの予約を怠ったことも無い。生徒会にいれば重宝されているであろう人材のクセして”働きたくない”と言った時は、エアグルーヴはキレた。

「アレはアレで一応いいところはあるんです」

幼児退行するとめんどくさいが、可愛げは出るのだ。エアグルーヴの母性が少しばかり刺激されたほどである。トレセン学園一母性に溢れたウマ娘が担当にいらなくて良かったと思いつつ、彼を矯正しようと試みたが良くなつたのは生活態度だけで性格は相変わらずであった。しかし、腐つてはいるが、味はあるとエアグルーヴは会長や後輩と行くからと連れ出したショッピンングや食事の際に交わした会話を思い出していく。

『お前、マジでいい女よな』『どこから見ても美人とかせこくない？』

『顔もいい上にスタイルもいいとか世界でも救ったことあるの？』

『お前の子供ぜつてえ可愛いじゃん』『顔がいいやつは食べ方もいいんですねー！ 羨ましー！』

「——あのバカ……ッ！」

割と昔から言われてたと髪の毛をわしゃわしゃと掻き乱して机へとダイブするほど

トレーナーとの思い出に浸っているエアグルーヴの前では、私も自分のトレーナーに顔がいいとか、賢いとか褒めて欲しいなどシンボルドルフも思っていた。だがそれよりも、今はエアグルーヴとそのトレーナーのことだと我に返る。

「彼に辞められるとリベンジが果たせなくなるな……」

私情ではあるが、唯一無二。2年連続天皇賞制覇という目標を阻止してきたのは彼のウマ娘だ。彼がいなくなってもそのウマ娘の調子や能力は変わらないと思う。しかし、勝つてもどこか納得できない自分があるとシンボルドルフは腰を上げた。

「私は理事長の所へ確認に行ってくる」

「……私もお供します」

エアグルーヴの申し出に頷いたルドルフは生徒会室の扉を開け放つ。向かう先は理事長室だ。

④名誉終身追っかけ厄介ヲタク

辞めたいという話をする、人はいつも否定的だ。どうしてそこで諦めるんだと問う者やもうちよつと頑張ってみないかと引き止めてくる者もいる。快く送り出されたという者は見たことがない。

これは彼らなりの温情と捉えることも出来れば、貴重な戦力を失ってしまふことを危惧しているとも取れる。もし、辞めたいと言つて簡単に放り出されてしまったら、自分は誰にも惜しまれずに手放されるほどに愚かな存在であつたのかと自覚してしまう。

そう考えれば昨日の俺は理由は聞かれても、辞めるのを止めてきた者は誰もいなかった。冗談なのかと言われて本気だと伝えても制止はされなかつた。つまりは俺はこの学園にとつても、ウマ娘たちにとつても無価値だつたということだろうか。

エイプリルフルには虚言を吐きまくり、夏合宿では担当ウマ娘から目を離して他の女性の身体を目で追っている。練習場に顔を出すのは呼ばれた時だけで、呼ばれない限りは冷暖房のある仮眠室を占拠してダラダラと過ごしている俺だが、顔は悪くないしトレセン学園での生活で鍛えられた肉体とメンタルは中々のものだ。なか卯の持ち帰り牛丼をウマ娘に奪われて病んでから音信不通になつたトレーナーに比べれば常務取締役

役と部長くらいの差がある。

身長179センチ、体重は……健康診断の紙は結果だけ見て捨てたから覚えてないや。爽やかヘアースタイル（自称）に恐れ知らずなクールフェイス（自称）、引き締まった肉体（自称）に加えて6年間のトレーナー業務で得た収入を晒せば、身体とお金目当ての女の子がわんさか釣れることは間違いない。しかし、そこに愛はあるんか？ 俺は理想に生きる男。顔や身体、収入で食いつく女には興味ありません！ 俺だつて女の子は見た目だけじゃなくて中身も大切だということはこの歳になれば理解している。この俺が性格を語るのはタブーな気がするが、あえて言わせてもらおう！ 顔も身体も性格もどちやクソにいい女と結婚したいです。

閑話休題。

働きたくない＋結婚相手を探すためという邪な気持ちでトレーナーになったはいいが、結局めちやくちや働いて、拳句には彼女もできなかつた。まあ、ウマ娘という女の子と過ごしたおかげで女性への扱いには慣れた。今なら1時間もあれば初対面の女の子を落とすことが出来る……気がする！

話を戻していこう。快く送り出される者は組織に必要な者や不利益をもたらず

者が自主的に去った場合のみだ。大抵そういうやつは送り出されるのではなく、排除される。

では、引き止められもしないし、学園側やウマ娘から切られなかった俺は一体なんなのか。たまたま優秀なウマ娘にトレーナーがいなくて、その子の目の前にいたのが俺だったという話なのだが、それでも残してきた輝かしい実績は俺と共に共有される。可哀想なウマ娘たち。頑張ったのはお前たちなのに。いや、俺もめちやくちや頑張ったわ。テンション上げたいからって理由で横断幕も作らされたし、旗も作った。応援歌も作詞・作曲したし、オペラもやった。俺は本当にトレーナーか？ トレーナーの中には薬物実験に付き合わされたやつもいるらしいから、それに比べれば遥かにマシかもしれない。この前見たらナメック星人みたいになっていたが元に戻ったのだろうか。

そいつのことよりも、自分のことだ。俺ももう三十路。そろそろ身体が思うように動かなくなる時期だ。少しの運動で身体は悲鳴を上げ、胃は縮まりラーメンの替え玉が頼めなくなる。更に精力も弱って子供も作れなくなるかもしれないという歳だ。これは結婚を前提に妊娠してもらわねばと考えたところでキモすぎて死にたくなつた。そもそも彼女の一人も居ないのに……。

何故か気だるげな雰囲気漂っているので、消し去るために朝の陽光を浴びようと外

に出た。すると、外は大雨ザーザー。なるほど君の仕業か。低気圧は敵。憎むべき敵。こんな雨の中、他の担当ウマ娘への報告に行くのはめんどくせえなど自然にため息が出る。ため息とはそういうものだ。

濡れるから仮眠室へと戻ろうとすると、バチャバチャと水の滴ったコンクリートを走ってくる音が聞こえてくる。こんな朝早くに誰だと目を見やれば暗くてもよく映えるキラキラした栗色の髪を揺らして、見知った顔がこちらへと向かってくる。

そいつは雨宿りするために、建物の屋根の下に入ると口を開いた。

「もお〜雨が降るだなんて聞いてないんだけど〜!」

学生カバンからピンク色のタオルを出して濡れた肌や衣服を拭き取る彼女は、ようやく気付いたといわんばかりに俺の方を見た。

「あ、キミはファル子のファン第1号のトレーナーさんじゃん!　ぐーぜんだね!」

「……………なにやってんのお前!」

いつ突っ込もうか悩んでいたが、さすがにこの時間に偶然ここへ来たというのは無理がありすぎるだろうと俺は担当ウマ娘の1人、スマートファルコンへと口を開いた。

「うーん、青春ドラマに出ることになった時の練習？ ほら、今のウマドルは走って歌って踊れるだけじゃなくて、もつとマルチにいけないといけないから！」

「そうじゃなくて……つてまあいいや」

なんか聞くと長くなりそうだ。昨今のウマドル事情について早朝からハイテンションかつ早口で語られるとか新しい拷問かな？ 俺が投げやりになんていいよと手を振ると、ファル子は嬉しそうに頷いた。

「うん！ ファル子、トレーナーさんのそういうところ結構好きだよ！」

ああ、俺も自分のこういう気にしといて、あとから別にいいやつてなるところ嫌いじゃないよ。好きかって聞かれたら微妙だけど。

「で、どうだった？ ファル子の演技、ウマドル界でも通じそう？」

「さあ、俺はウマ娘界しか知らないからなあ。プロデューサーかマネージャーさん辺りに聞いてみれば？」

なんならそのウマ娘界に関してもあやふやなので、プロデューサーもマネージャーもよく分かっていないんだけどね。

「……ファル子にとってのプロデューサーさんとマネージャーさんは、トレーナーさんだけだよ？」

「ンンンン、それでは拙僧過労死してしまいますぞ？」

しかも全部裏方じゃん。裏方好きですけどね？ 本番頑張らなくていいって考えると、もうずっと裏方でいいなって思えるし、人生も主役じゃなくて脇役かモブでもいいやっとなる。

けれど、スマートファルコンはそうでは無い。常にセンター、1番目立つところにい

たい。色んな人にチャホヤされたい。愛されたいという願望を持っている。それに見合った努力は怠らないし、ファンとの交流や自身の宣伝活動にも力を入れている。まさに努力の化身だ。

そんな彼女が貴重な睡眠時間を削ってまでここに来た理由には大凡の見当はついている。理事長室、生徒会室で暴露してきたんだ。学園全体とまではいかなくても担当たちの耳には入っていてもおかしくは無い。

「ねえ、トレーナーさん」

呼ばれて俺はファル子の顔を見た。その顔はいつものファン達へと向ける笑顔に溢れたものではなかった。雨に濡れてなのか、それとも暗い外気が彼女に沈鬱な表情を引き出させているのか、16番人気の俺が辞めるということを知って悲しんでいるというものだが、答えは今のところ分からない。

「ウマドルってどれくらいで結婚するのがいいのかな?」

「そういうのはファル子の方が詳しそうだけどな」

「うん、そうなんだけど。よく分からなくて」

みんなバラバラだし、なんならしてない子もいるしと小さく言った。まあ、ヒトのアイドルだつて婚期はバラバラだし、そこはウマ娘と大差ないだろう。大抵は30近くに
なつてからな気がする。俺やん！

「フアル子は結婚したいのか？」

「うん！ だつて、結婚つて女の子の夢だよ？ 真っ白で綺麗な教会で、純白のウェディングドレスを着て、みんなに祝福されて、素敵な旦那様と幸せな家庭を築くんだよ？」

わあ、俺よりも結婚に前向きな上に結婚式やその後のことまで想定してらっしやる。女子高生がそう考えているのに対して、俺はと言うと相手の妊娠と俺が働かないことしか考えていない。控えめに言ってもカスである。

「でもさ、ウマドルになる以上、結婚はしばらく諦めなきゃーって」

壁に背中を預けたファル子は雨を降らせている雲を見ながらそう零した。

「……トレーナーさんは、結婚したいんだよね」

「ああ」

「いないと思うけど、相手いるの？」

「いないって分かるのに聞くのやめてくれない？」

「それなのに結婚したいの？」

「……まあ、おかしいこと言ってる自覚はある。けど、したいって思ったんだからしょうがない」

お前のウマドルと同じだと、続けても良かったが、朝だからか紡げる言葉には限りがある

あるらしい。ファル子と同じくらいつまでも雨を降らせてそうな暗い雲を見つめる。

「もう、辞めちゃうの？　ファル子の次のライブ、応援してくれないの？」

「嫁ができるまでは応援出来ると思うぜ」

なんなら結婚した後でも行っちゃうわ。なんと言っても俺はファル子が認めたファン第1号なのだ。1号ってのは万物万象、全ての原初だ。仮面ライダーしかり初号機しかり、ロボット系の1号機しかり。始まりがなければ後に続くものは無いんだ。だから、1番初めにファル子を応援した俺が行かなくてどうするってハナシ。名誉終身スマートファルコン応援団長の座は譲る気は無い。

「……そっか、じゃあトレーナーさんが結婚できないように願ってないかね」

「それはちよいと酷くない？　ファンを幸せにするのがアイドルの仕事では？」

「結婚出来なくてもファル子がライブで幸せにしてあげるから問題ないよ！」

それは魅力的な提案だ。結婚出来なかったらファル子追っかけの厄介ヲタクにジブチエンジしようかしら。貢ぐお金はファル子に稼がせてもらったわけだし。

「だから、待っててね。私も待ってるから」

差し出された小指へと俺は指をかける。嘘ついたら針千本飲ますとは言われなかったが、もし約束を破ったら何をさせられるのやら。ライブで飛ばす用のテープ作りとかは勘弁して欲しいものだ。

⑤ 友達の定義から教えてくれないかしら

ファル子との会話を終えた俺はケータイをチェックする。読みもしないメールマガジンの通知や、おすすめ商品の宣伝、ウマツターからの興味はありませんかというメッセージと大して重要性はないものばかりだと思っていたが、下の方にたづなさんを通して理事長からメッセージが来ていた。

堅苦しい文言ばかりが並んでいたが、要するに午後3時頃に理事長室に来て欲しいというものだ。話すことは話したし、出すものは出したんだが。辞表に不備があったのなら書き直すが、理由が不当だとか言われたら俺は断固戦わざるを得ない。たとえばんな理由だとしても、退職する自由はあるはずだ。しかも、結婚するから辞めるという言葉のどこに不当性があるのだろうか。相手がいないから？ それを見つげるために辞めるんだよ!!

まあ、相手もいないのに辞めてどうするんだよとは全くもって同感だ。反論のしようも無い。けれども、結婚するのに相手は必要だが、退職するのに相手は必要ないのだ。何を言ってるのか分からないって？ 俺にも分からない。

いつものように一人自問自答を繰り返しながら、仮眠室の扉を開ける。雨は止んでおり、雲は流れて青い空で太陽がギンギラギンにさりげなく光っている。

さて、せつかくの土曜日と言うのに、15時に予定ができてしまった。トレーナーに休日などあってないようなものと聞いたことがある。基本的に放任主義の俺は毎日が日曜日だったので、勝ち組、I, m winner. と働きの他のトレーナー達が嘲笑っていたが、担当が増えるにつれて毎日が平日へと化していた。ウマの勝ち。俺は無価値。休み無し。それ悲しい話。たかが休み。それでも働く、毎日真剣とビートを刻みながら横断幕や応援旗を作った記憶が懐かしい。ああいうのは有志で作るもんだと思うんですけど、どうして俺は一人で作ってたんですかね？

答えは簡単、俺は友達が少ない。友達の定義から教えてくれないかしらと、友達がいない人の発言ができるくらいには少ない。少なすぎて”達”じゃなくて、”人”ってつけるのが適切なレベルだ。

今の世の中では、顔も本名も知らないような相手を友達と呼称することが可能らしい。加えて、バトルの後はみんな友達という名言もある。それらを踏まえれば俺の担当たちで倒してきたウマ娘とトレーナーはみんな友達ってことになるな！ また一つ、世界の真理を解き明かしたところでトレセン学園のグラウンドへとたどり着く。

見れば顔は知ってるけど名前はよく覚えていないウマ娘がトレーナーの指示を受けてわんさかいやがる。授業もなく、土曜日だというのに精が出るものだと感心しながら、自分の担当の中で直接報告出来ていない者を探す。しかし、今日は屋外練習ではないのか、あるいは休日になっているのか、俺の担当ウマ娘は見られない。

「あら、アナタはエアグルーヴさんのトレーナーじゃない。珍しい」

探していると、見たことはあるがこれまた名前がよく分からないウマ娘に声をかけられた。いかにもお嬢様って感じの毅然とした振る舞いに、メジロ家っぽくは無い毛並み。そう名前は確か……

「キングテイオー」

「キングヘイローよ!!!」

ああ、そうだったキングヘイローだ。あれ？　じゃあテイオーはなんだ？　でも、テイオーは白い毛があった気がするしヘイローで合ってるのか。ちい、覚えた。彼女の名

前を復唱していると、こちらへと近づいてくる人影がひとつ。

「我が王の名前を間違えないで欲しいな、結婚するから辞めるトレーナーくん」

キングヘイローのトレーナーは俺に意趣返しどころか倍返しで名前すら呼ばずにそう言うのと、彼女の隣に立つ。

「悪い、自分の担当以外は覚えられなくてな」

「それってトレーナーとしてどうなの？」

「本当のトレーナーなら結婚したいから辞めたいなどというくだらない理由では辞めな
いよ我が王」

キングヘイローに訊かれて嫌味たらしく肩を竦めた。

「結婚がくだらないだと？ それ結婚したくても結婚できないやつにも言えんの？」

もしくはお前が結婚したいと思った時に言われて何とも思わないの？

「趣旨を履き違えなくてくれたまえ。くだらないのは結婚ではなく、それを理由に逃げる君さ」

「逃げる……？」

「ああ、そうだとも」

確かに俺は逃げまくりの人生だが、中央のトレセンでトレーナーができるように努力を積み重ねたし、運と慧眼で優秀なウマ娘を引き入れて、GIレースで優勝していただいた男だぞ。逃げるは恥だが役に立つという、どっかの国のことわざをご存知ではない？

「我が王は完璧だった。短距離、マイルレース共に。これ以上ない仕上がりがった。そう、君のウマ娘さえいなければ」

どこの国のことわざだっけと思案していると、キングのトレーナーは一人でぶつくさ喋っていた。確かハから始まる国だった気がする。

「恨んでいるんじゃない。むしろ感謝したいくらいだ。おかげで、今の王はより高みへと至ることが出来た」

は、は、はから始まる国……ハイチ共和国とあとなんだっけな。

「だから勝ち逃げは許さない。次は私と我が王が、君と君のウマ娘よりも上だということとを証明」

「なあ、ハで始まる国ってハイチ共和国以外に何があったっけ？」

「えっ？ ……バヤパを抜くなら、あとはハンガリーくらいだと思うが」

ああ、そうだハンガリーだ！ ハンガリーのことわざだった！

「おう、サンキューな！」

俺の悩みも解決したし、ここには俺の担当はいないみたいだし、室内練習場でも探してみるか。俺は感謝の言葉を口にする、その場から立ち去る。

「大丈夫？」

「……ああ、心配ご無用だ我が王」

耳にそんな声が届いたが、ウマ娘に心配かけるトレーナーが俺以外にもいるとは。やはり、俺だけがダメな訳では無いようだ。

⑥俺は次男だから

ウマ娘専門の育成機関の中でも、中央だとか、最高峰だとかともてはやされるトレセン学園の規模は伊達ではなく、屋内練習場に、体育館、トレーニングジムに屋内温水プール……つてこの辺は前も言った気がするな。これらに加えてライブの練習をするためのステージもあったりと、トレセン学園は伊達じゃない……！ と力強く言いたくなるような設備だ。

これだけ練習場が多いと担当ウマ娘のスケジュールを把握していないトレーナーが彼女たちの1人を見つけるのにも一苦労である。よく良く考えれば今日はグラウンドではなく、ジムとプールを抑えるように言われていたのでどちらかだろう。

ジムはジャージ、もしくは薄手のトレーニングウェアを着て、プールでは当然だが学園指定の水着を着用することが義務付けられている。どちらも眼福なのだが、如何せんウチの指定服は制服以外可愛げがない。まあ、俺の担当たちは可愛いからクソダサジャージや世間一般的なスクール水着すら着こなしてしまうんですけどね。しかし、1人だけ目の毒になる奴がいる。あれはダメだ次元が違いすぎる。エアグルーヴよりも大きいよ絶対……と初めて見た彼女の乳揺れを思い出していると噂をしていないのに

そいつはやって来た。

「WOW！ トレーナーさん！ グッドモーニング！」

先程のトーカーヘイローを短距離レースで3バ身差を付けて快勝したスピードク
イーン、パワフルウマ娘の異名を持つ、俺の担当ウマ娘、その名をタイキシヤトル。

アメリカからやって来た元気っ子で、異名の通りのパワフルな性格とダイナマイトボ
デイが特徴的なマイルの女王だ。

「おお……お、おはよう。……今日もその、元気、そう、だな」

「ハイ！ ワタシはいつも元気ネー！」

ああ、今日も元気に揺れ……ちがつ、違う！ 己のウマ娘をそんな下卑た目で……想
像するのは自分のお母さん、お母さん……よし、落ち着いた。にしても、ホントに高校
生とは思えない身体だ。勝負服もThe Americanって感じがして、初めは目
のやり場に困ったし、タイキシヤトルにいやらしい視線を向ける奴らにはレーザー光線

を当てなければならなかった。俺は担当だから邪な視線を向けたりとか、変な気を起こしたりはしない。心はそう……修行僧だ。

「ハウデイ？ トレーナーはどうデスか？」

「無論、元気で候」

元気すぎて言葉遣いがやや古風になるくらい元気。だって土曜日なんだから。

「That's nice! それでどうしてここに居るデスか？」

あ、いちやいけませぬか？ 否、そうは言われておらぬで候。

「貴殿を探していた」

「貴殿？ ワタシのことデスか？」

「肯定」

俺が頷くと、タイキシヤトルは首を傾げた。

「……どうして理事長と同じ話し方デスか？」

「否定。そんなつもりは」

「そんなことナイ？ ノー！ ワタシの目はノット・ゴマカセ！」

腕を組みながら胡乱な眼差しを向けてくるタイキシヤトル。なんだそのハイブリッ
ドランゲージは。まあ、いつもの事か。

「ふつ、流石タイキシヤトル。みんなの目は誤魔化せてもお前の目はノット・ゴマカセ
だったな」

「イエース！ E x a c t l y !」

ふふんと得意気になってしまい、修行僧の人格が離れてしまう。元からそんな人格はないんだけどね。……つて、いかんいかん、このままでは本題に入ることが出来ない。

「で、タイキシヤトルを探してた理由なんだが」

どう話したものと顎に手を添える。超元氣印の健康優良児だが、心はそうでも無い。些細なことで落ち込むし、意外とさみしがりで、一人でいることを嫌うほどだ。今日は一人であることを見るに、こいつも俺を探していたのかもしれない。そんな女の子にどう伝えるか悩んだ結果。

「俺、トレーナー辞めるんだ」

悩んでも仕方ねえ！ 猪突猛進ゴー、ストレート！ 俺ちゃん、トレーナー辞めるつてよと言うと、タイキシヤトルはぱちくりと瞬きを繰り返す。

「What? どういう意味デスか？」

ありや、伝わらないか。まあやめるって言葉の意味は日本も外国も複数あるもんだしな。仕事を辞めるって英語でどういうんだっけか。それっぽいのは stop だけど、止めるって意味の方が強そうだな。続けていたことを辞めるから discontinue でも通じるか。さっきのやつに聞いとけばよかつたな。なんか賢そうだったし。

だが、俺には俺なりの言葉がある。高校以降触れていない言葉を無理に引き出すよりは、回りくどくてもしつかりと伝えるべきだ。

「もうお前の面倒を……いや、見てないな。あー、傍に……大していなかつたな。あとは、そうだな……」

「ノー！ そんなことないデス！」

思つた以上に彼女を放置していたことが浮き彫りとなり、言葉に詰まつてしまふ。しかし、こんな男にでも優しく笑顔を見せてくれるのがタイキシャトルという女の子だ。優しすぎてウマ息子になつたわね……ヒヒン。それならいいんだがと仕切り直して、俺は伝えるべき言葉を述べる。

「俺、結婚するんだ」

「それは絶対ないデース！ トレーナーさんはダメデース！ 戦争の権化デース！」

「ええ……」

結婚出来ないって言われるのはまだしもダメとか、戦争を誘発する存在になるとまで言われるのは心外なのだが。具体的に何がダメなのでしょうかと下手に出て尋ねてみる。

「そういうところデース」

「What!?! Why!?!」

「エアグルーヴも言ってます！ トレーナーさんはノー！ ガールフレンド作れません！」

わあ、言いそう。作らないとかできなさそうとかじゃなくて作れないって断言してる。けど、俺は作れないんじゃないかと、作らないんだ。だが、そんな反論を許さないかのようにタイキシャツルは口を開いた。

「だから、トレーナーさんは、ココにいるべきデスっ！」

いやしかしここにいると結婚出来ないしな。どこにいても結婚できない気はしてるんですけど。それも俺の本性が剥き出しになっていけばという話。俺の鍛え上げた演技力なら、交際中くらいは猫を被るのも容易いこと。その後に本性がバレて離婚ってなっても、法に触れないようにあらゆる手を使って阻止してやると将来の嫁に束縛宣言をしていると、タイキシャツルの肩が震え出した。

「だ、だから、いて、くだサイ……トレーナー……」

「お、お……」

どんなに強がってもこの子はまだ子供だ。10年前の俺よりも脆く弱い女の子。人より脚が速くても、身体が強くても、心は年頃の女の子なのだ。頼りなくても、クズを絵に描いたような性格をしている俺でも、3年も一緒にいれば愛着のようなものが湧いて、寂しいって気持ち芽生えてくるんだろう。

「悪い。でも、もう決めたことなんだ」

この決断は取り下げることが出来ない。辞表も出したし、言葉にもした。辞めることも、結婚することも。

相談したらきつと止められると思ったから。この子は止めてくると俺は分かっていたから。言うのも最後が良かった。でも、止めてくれなかったら……つと、俺まで暗くなるのは良くねえわ。

「そんなあ……」

「気休めになるかは分からないけど、心はずっと一緒だ」

「……ココロ？」

「ああ、ハート。気持ちちつてやつ」

一緒に傍にいらなくても、同じ空の下にいれば心は通じ合えるし、今はインターネット社会なんだ。ケータイっあればいつだって連絡が取れるし、SNSを使えば近況を知ることにも出来る。だから、俺がトレーナーをやめてトレセン学園から居なくなっても、心はずつとタイキシャツルと共にある。

「トレーナーさんと気持ちちがトウギヤザー……？」

涙を溜めながら首を傾げるタイキシャツルに俺が力強く頷くと、彼女の顔が一転して笑顔へと変わる。俺の気持ちちが伝わったと安心すると、彼女は俺へと飛びついてくる。

「うおっ!? つて、どうした急に」

「親愛のハグですっ！」

タイキシャツトルは仲のいいやつにハグと称してタックルしたりすることがあったが、俺にしたことは1度もなかった。てつきり、嫌われてるか、良くてそこまで好きじゃないからだと思っていたが。なんだよ……結構可愛いじゃねえか……ふへっ。

しかし、タイキシャツトルの身長は172cm。俺と7センチしか差がない。髪の毛から漂うシャンプーの香りに、女の子特有の柔肌……これが女の子……ッ！ 圧倒的リラクゼーションッ！ だが、俺はトレーナー。彼女の保護者。監督責任者。犯罪者になるわけにはいかない。いでよ、マイマザー！ ……よし、落ち着いた。俺は次男だけど耐えられた！

「トレーナーさん、さっきの言葉、約束デス！」

そう言いながら彼女は小指を差し出してくる。ファル子辺りが教えたのだろうか。この子には、嘘をついたら何をさせられるのだろうか。

「指切りげんまんウソついたらハリセンボン飲ますデス！」

「はは、そいつは怖え」

出来れば痩せてる方がいいな。角野……なんだっけ。クレアおばさんでもないや。まあ、似てるのが多すぎる方は御遠慮だ。そして、針千本もハリセンボンも飲みたくはない。だから、どんなに遠く離れていても俺の心だけは彼女の傍にいろように努力しよう。この答えがたとえ詭弁だとしても。互いに後悔はしないように。

⑦レクイエムには早すぎる

15時に理事長と会うまで暇だったし、腹も減ったのでタイキシヤトルとピックマツクを食べた。ウマ娘の食欲は尋常ではなく、俺の財布が空になるくらい食うやつがほとんどだったので、初めの頃は外食は避けるようにしていたのだが、私腹を肥やし自分の財布よりも店の在庫を心配できるくらいの余裕がある俺に怖いものはない。

俺は恐怖を克服することは生きることだと思う。真に頂点に立つものはほんのちっぽけな恐怖をも持たないやつのことだ。つまり、エアグルーヴにほんのちっぽけな、ほんの、ほんのだ。これくらいの恐怖心を持つ俺はまだ生きているとは言えない。まああいつ顔がいいからな。変な性癖に目覚めそうになるから、目覚める前に防衛機制が働いちやうんだらうなあ……。やめたらSMクラブとか風俗とか、キャバクラとか行ってみたかったけど行けなかったとか、やりたかったこともやってみよう。

しかし、そうやって、したかった事やってもウマ娘のこととかが脳裏にチラつくんだらうなど、タイキシヤトルの食べ顔を見ていたら思ってしまった。結婚した後にはトレーナー職に復帰するのは、アリなのだろうか。ライセンスは持つてるわけだし可能だとは思うが。

だが、またここに来るといふのは難しいだろう。ただでさえ俺はいい感情を抱かれていないというのに。しかも結婚相手もいないのに、結婚を理由に辞めるのだから救えない。オマケに出戻りする時に結婚出来てなかったら冷ややかな眼差しを向けられることは確実。想像しただけでゾクゾクしますわ。

そんな冗談は置いておいて、報告できていないウマ娘はあと1人。最後の1人だからか気が引き締まるような、予定していたタイキシヤトルでは無いから、楽な気もする。そいつは担当の中では一番奇行に走りがちだが、大人びているし、話せば分かってくれるだろう。

いや、話せば分かるだなんてのは強者の考えだ。なんで言わなかったとか、言葉で通じ合えるなんてのはまやかした。俺が今まで彼女たちに弄してきた言葉も嘘偽りがなくて、ちゃんと通じているかは別の話だ。俺は弱者だから、言葉で伝わらないなら行動で示すしかない。それでも分かって貰えないならその時に考えればいいと思っっているが、果たしてちゃんと伝えられるだろうかと不安になる。

でも、伝えようとする気持ちがあれば、伝えようすることを諦めなければ、気持ちが届くと俺は信じている。エアグルーヴは納得はしてなさそうだったから、また会わないとな。

「空は晴れやかだというのに、キミの心はそうではなさそうだね」

そう考えていると、一迅の風が舞う。風と共に現れた存在が起こしたかのように。

大仰に、荘厳に、腹のそこに響くかのような重音はオペラ歌手や歌劇団の役者を思わせる。そして、古代ギリシャで造られた彫刻像にも似た美しい容姿を持つ。アメジストのような瞳に、明るい栗毛のショートカットは快活かつ、気品を漂わせ、左耳にはイエロー、右耳にはグリーンの飾りをつけ、更に霸王を名乗る者としての矜持かピンクの王冠を被っている。世界ひろしといえどこんなウマ娘は世界にたった一人。その名をレイムオペラオー。

「やあ、3日ぶりだね、トレーナー」

座れよとは言われなかったが、彼女は俺へと伸ばした手を下げると、腰へと当てた。自称・最強、最速にして、最高の美貌を持つ天才ウマ娘。それだけ豪語できる自信を持ち合わせたスーパーナルシストであり、生粋のボクっ娘だ。属性過多にもほどがある。

最強の座に君臨し、挑んでくる者をさらに上回る「霸王」となることを目指す彼女は

俺のどの担当より好戦的ではあるが、自身こそ最強という確固たる自信ゆえに敵の存在を肯定するからか、彼女を嫌う者は少ない。

「話したいことがあるのだろうか？　この前、ボクの趣味に付き合ってもらったお礼だ。聞いただけ聞こうじゃないか」

「珍しいな、お前から俺の話を知りたいだなんて」

「失敬だな。ボクはキミと違って誰の話でも聞くよ」

それでは俺が人の話をまともに聞いてないみたいじゃないか。間違っただけじゃないかな。俺がちゃんと話を聞くのは、家族とたった一人の友人、担当と上司だけだ。それ以外の話は妬みや宣戦布告だとか、聞いてもどうしようもないやつばかりだしな。人を見据えるために成長させ、団結させるのは明確な敵の存在だとは言え、俺を敵に見据えるだなんてどうかしてるぜまったく。

オペラオーの提案に甘えて、俺はこれからのことを話した。結婚するためにトレーナーを辞めること。相手は決まってるけど。

「決まっていらない？ それはおかしいな」

やっぱり、オペラオーもそう思う？ 俺ちゃんの名誉だとか、嫉妬やらは全部が全部ウマ娘のおかげなんだけど、トレーナーになれたのは俺自身の力だから、そこだけは認めて欲しい。それにトレーナーということ抜きにしてもマネーはあるし、男としての責任は果たせるくらいには成長したんだ。だから、1人くらいはなびいてくれてもええんやで。

しかし、オペラオーの言いたいことはそうでは無いらしい。

「キミにはボクがいるじゃないか」

「……………」

はて、なんの話だ。

「忘れたのかい？ あの日に共に語ったオースを」

「Oath?」

マジでなんの事かわからない……というわけでもない。テイエムオペラオーとは、共に味わった雪辱がある。彼女はいくつものレースで勝ってきた。天皇賞に、宝塚記念、有《font:ul40》馬《font》記念。だが、勝てなかったレースが一つだけある。日本ダービーだ。

デビューレースから連戦連勝で絶好調だったオペラオーがまさかの4着。流石のオペラオーもこの結果には来るものがあつたのか、珍しく涙を流していた。

そこからオペラオーは変わった。良い意味で。練習に見合つた自信と、自信に値する勝利を得てきた。勝ち方にこだわりのあつたオペラオーはより高みへと至つた。ただ勝つだけではない。誰もが、オペラオーが勝つて当然だと思わせるような、そんなレースをし始めた。

「悪い。けど、トレーナーが変わってもレースには出られる」

「レース……? 確かにキミがいなくても、出られる。でも、ボクはキミと駆けたい」

「客席にいるつてのじゃ、ダメか」

「論外だね」

トレーナーもレースが始まれば終わるまで客席での応援になる。それはトレーナーでなくても変わらない。ただのお客さんでも、応援する時は客席からだ。立場が変わっても、トレーナーじゃなくなっても、応援する場所は変わらない。

けど、これこそが詭弁だ。トレーナーとは本来、レースまでウマ娘のそばに居て支えてやるものだ。時に励まして、勇気づけて、転んだら手を差し伸べる。ただ応援するだけじゃない。共に傷つきあっても、立ち上がる。何度でも進み続けるパートナー、それがウマ娘とトレーナーのあるべき姿。

「でも、俺は」

「ボクはキミに、隣にいる以上のことは望んではない」

「……いや、オペラとか作詞作曲だとかやらせたじゃん」

「……」

スつと目を逸らされた。いい感じに話して俺を引き止める気だったのか。オペラオーはわざとらしく咳払いをすると、手を開き肘を曲げる。その様はパラパラと言うよりは *D a i s u k e* だ。

「ある人は言った！ 女は男にとって太陽だと。それはつまり、太陽であるボクはキミの太陽であることを表している！ わかるね？」

「全然わからん」

「ふつ、やはりボクという輝きが強すぎるみたいだ」

急に自分に酔いしれるのやめてもらっていいですか？ 一体誰に似たんだか。こいつは元からだったわ。

「お前は俺じゃなくても、勝てると思うぞ」

なんなら俺じゃない方が勝てるまである。俺より真面目なやつにトレーニングメニュー組んでもらって、四六時中レースに向き合ったら勝てる確率は上がるはずだ。

だが、もし俺と共に勝ちたいと言ってくれているのなら、辞めるのは次の重賞レースが終わるまで待つって手もある。しかし、他のみんなにはもう辞めると伝えている手前、オペラオーだけ特別扱ってのは難しい。

「……ああ、そうさ。ボクはキミがいなくても勝てるよ。あの時はキミがいても、ボクは勝てなかったんだから」

「だったら」

「でも、キミが居なくなっただ後にボクが勝ち続けても、キミが……!」

オペラオーは言って、しまったという表情を浮かべると言葉を飲み込んだ。なるほ

ど、こいつはダメでどうしようもないトレーナーがいなくなった後に勝ってしまうことが申し訳ないらしい。殊勝なことだ。

「そんなこと気にしなくていい。お前の物語だ。俺みたいな脇役の事は放っておけよ」

むしろ、ヒールとして貶してくれて構わない。天才、テイエムオペラオーの足を引つ張った男として。あ、いや、それはやめてもらおう。そのせいで女の子が寄ってこなくなったら、困るしな。

「どんな脇役でもボクを盛り立ててくれるなら、見捨てるわけにはいかないさ」

おおご立派。そういえば、こいつこんな物言いのくせに後輩からは結構慕われるんだよなあ。今どきのウマ娘はこういうのが好きなのかしらねえと近所のおばさんが噂でもしてそうだ。

「それにキミは脇役なんかじゃないよ」

「え？　そうなの？」

知らなかったわそんなこと……。だとしたらどの辺りなのかしら。監督ティエムオペラオー。脚本ティエムオペラオー。演出ティエムオペラオー。主役ティエムオペラオーの物語のどこに俺が入り込む余地があるのか。ああ、音楽か。役者ですらなかった……。と衝撃の事実に気づいているとオペラオーは口を開く。

「だから、行かないでくれ。レクイエムには……早すぎる」

鎮魂歌か。まあ、トレーナーでなくなるわけだし、表現に誇張はあれど否定する程ではない。

これまでの話でオペラオーも含めて、他の担当の話を統合すると、やはり相談もなしに辞めるとするのは早計だったのかもしれない。辞めるにしても具体的な時期や、最後に何をするかとか、その辺を決めてからの方がみんな納得出来ただろう。

でも、カレンやファル子、タイキシヤトルは完全に納得したというわけではなさうだが、俺のことを送り出してもいいという感じだった。エアグルーヴはちよつと怖くて、最後まで言えていないが。そして、オペラオーがここまでごねるといのはやや予想外

だった。

「分かった」

この後、理事長との話し合いがある。辞表を拒否することは出来ないはずだから、俺が辞めることは既定路線になっていたとしても、どの時期に辞めるかまでは決まっていないはずだ。おそらく、早くて受理した日になるだろうが、俺の担当は数が多いし後任を決めるためにも、学園側としても日にちは欲しいはずだ。だったら、そこを交渉材料にしつつ、全員のどのレースで俺が契約解除をするかを決めれば、皆平等に見届けることが出来るかもしれない。

「……本当か？」

「ああ」

あくまで可能性だが、その可能性が1%だとしてもやれることはやるべきだ。やらずに後悔するよりは、やって後悔しよう。無理なら無理で手は考えよう。せめて、最後まで

らいは男らしく行こうじゃないか。

⑧俺の意思はダイヤモンドより硬い

正直に言えば、他のやり方もあったのではないかと、心の根底で燻っている気持ちがあつた。簡単かつシンプルに終わらせようと、策を弄することなく、後腐れもなくここから去ろうと直線的に考えた結果が彼女の涙であるのなら、俺は考えを改める必要がある。しかし、後腐れもなく誰も嫌な気持ちにならないお別れの方法を俺は知らない。何故ならば、俺がちやんと誰かとお別れするのはこれが初めてなのだから。

学校では五教科に加えて副教科と人生で使い続けられる知識はひと握りのことしか教えてくれなくて、困ったことに自動車免許の取り方とか国民年金がいつやって来るとか、友達や恋人の作り方は教えてくれない。

悪いのは俺ではなく社会だと謳って来たが、今回ばかりは俺が悪いと言わざるを得ない。言葉や行動一つで変えられるものがあつたはずなのに、考えることも無く自分の気持ちを優先した結果が女の子の涙となれば、結婚なんてできるはずがない。

「ごっごっ」

理事長室の扉前まで来てノックをすると、ドアの向こうからたづなさんの声がかえってくる。その言葉を合図に俺は戸を引くと共に口を開く。

「失礼します」

扉を開いて入った先には、理事長がおり、その隣にはたづなさんが立っている。これはいつも通りのことだ。違うのは他にも居合わせている人間がいる点だ。

理事長の机の前には何故か会長とエアグルーヴがいる。生徒会会長と副会長という立場にいるにしても、たった一人のトレーナーのこれからを決める場に参加するものだろうか。まあ、エアグルーヴは分かるにしても、さも平然と言う顔で立っている会長がよく分からない。

そして、その逆側にはカレンにファル子、タイキシヤトルと、テイエムオペラオー以外の担当ウマ娘が揃っていた。全員が何か言いたげな目でこちらを見てくるが、俺からはただ一つ。オペラオーも呼んであげて？

「わあ、こんな大勢に見られるなんて興奮しちゃうわね」

「……真面目にやれ」

個室で女の子複数に視姦された経験が無いため、自分の雰囲気を持ち込もうとするがエアグルーヴママによってそれも却下される。この様子を見守っていた理事長は苦々しげに深いため息を吐いてから、いつもの口調で話を切り出した。

「報告ッ！ 君の退職志願についてだ！」

手には封を切られた辞表届の中身がある。もう既に目は通したようだが、肝心の承認印のようなものが押されていないように思える。まずは良かったと思いつつも、それが悟られないように努めて平静を装う。

「確認ッ！ 気持ちちは、変わらないか？」

「……そつすね、結婚するために辞めるって意思はダイヤモンドより硬い自負があります」

ダイヤモンドってハンマーで割れるんじゃないかなかったつけというカレンの囁き声を拾うよりも先にたづなさんが口を開いた。

「そう、ですか。であれば、貴方の辞表を受理しましょう。でも、すぐにお辞めになることは、叶いません」

「どういうことですか？」

「まず、貴方の担当ウマ娘の引き受け先が決まっています。皆さんは現担当のウマ娘の方々と練習に励んでいる時に、急に貴方のウマ娘を引き受けるのは難しいからです」

でしようねとその言葉に俺は首肯して、話の続きを促す。

「次に貴方の退職金の精査に、手続きに必要な書類の準備もあります。そして最後に……」

たづなさんは躊躇うように1度、言葉を区切って、俺から視線を外し、エアグルーヴとカレンたちの方を見た。

「……貴方の担当ウマ娘が納得されていません」

おかしいなエアグルーヴ以外は納得してくれたように感じていたのだが。それはまあいい。全ての話を聞いて、それを消化するように俺はゆつくりと頷いた。

「懇願ッ！ 諸々の話が解決するまで、もう少しいてくれないだろうか？」

理事長の言葉に俺は違和感を持つ。勝手に辞める側の俺にこうも気を遣わないといけないくらいトレーナー不足は深刻なのだろうか。

「顔をあげてください。それは俺が勝手に相談せずに辞めると言ったことが原因ですからお2人は悪くありません」

それに本来謝ったりお願いするのは俺であるはずだと気付き、俺は2人に顔を上げて

もらうように言ってから、不躰かつ無礼と分かっていながらもこちらから話を持ち出す。

「担当たちのことについては俺も考えていました。色々と厄介なことをしておきながら、俺から一つお願いがあります」

「ほう」

先に興味を示したのは会長だ。その後には理事長とたづなさんが視線を合わせて頷くと俺へとその目が向けられる。無言は言っても構わないというサインと取る。

「ここにいないオペラオーも含めて、担当全員を重賞で優勝してもらってから辞めようと考えているのですが、どうでしょうか？」

「それは……」

たづなさんが理事長へと視線をやる。その理事長は扇子と共に瞼を閉じて、何やら考

えているようだった。

「……キミは結婚相手を探すために、辞めると言っていたな？」

「ええ」

「結婚は諦めたのか？」

どうしてそうなるのかと思いつつも、俺は理事長の質問に首を振って答えた。

「むう、そうか……」

答えを聞いた理事長はとても悩ましげに腕を組む。学園を束ねる理事長だけあって、学園に関わる事は全て彼女の決定に委ねられる。そのため、俺を含めてこの部屋の誰もが理事長の言葉を待っている。

「再確認ッ！ キミは結婚するために辞める。結婚は諦めていないッ！」

「はい、その通りです」

それがどうかしたのかと軽く頷くと、理事長は閉じた扇子を俺へと向けるところ言い放った。

「……………な、ならッ！ わ、私とっ、け、けっ、結婚しろッ!!!」

—————
?

「り、理事長？」

「えっ、えっ？」

言葉の理解が及ばない俺に、理事長の言葉の意図が汲み取れていないたづなさんが声を上げ、カレンが理事長と俺を交互に見遣りながら声を出す。そして、僅かに遅れてエアグルーヴが口を開いた。

「ちよつと待つてください！ 一体それはどういふことですか！」

「説明ッ！ 彼は結婚するために辞めると言った！ ならば、結婚すれば辞める必要がなくなる！」

ああ、なるほどそういうことか。理事長頭いいじゃんと納得していると、俺へと冷たい視線が3つ突き刺さる。

「Wait！ トレーナーさん、どういふことですかあ!？」

「ファル子との約束は!？」

「お兄ちゃん、理事長と結婚しちゃうの!？」

唐突な質問攻めに俺は目を瞬かせて誤魔化そうとするも、そう簡単に3人とも逃してくれはしない。

「トレーナーさん、ファル子が事務所からOK貰えるまで待つてくれるって言つたじゃん！」

言つてない。

「お兄ちゃん！ 私と結婚してお兄ちゃんから夫になるつて！」

言つてない。

「ワタシと心は同じで、ダイスキって言いまシタ！」

言つてない。

全部言つてない。ずっとファンでいるとは言つたけど、ファル子と結婚するとは言つてないし、カレンのお兄ちゃんでなくなるのはトレーナーを辞めるからだと思つてたし、心は同じつてのは離れていてもそばにいるよ的なニュアンスだったんだが。

「キサマ……」

「いや、違うんだよエアグルーヴ」

なんで浮気がバレた夫みたいなことになってんの？ 浮気や不倫にしても数が多すぎるよ？ てか、誰一人として付き合っていないから冤罪だろこれ。俺は無実だ、弁護士を呼べ弁護士を！

「トレーナーさん、貴方……」

「すごいな君」

たづなさんは驚愕し、会長はただただ感心していた。ちよつとは助けるや。

「婚姻！ これにキミの判子を押せば終わりだ！」

「理事長長ッ!？」

ええ……もう婚姻届まであるの？　ご丁寧に俺が書く欄全部埋まってるし。でも、これに判子を押せば俺も妻持ちにジョブチェンジってマジ？　オマケに相手は日本有数のウマ娘育成学園の理事長。玉の輿じやんと身体中のポケットを漁り判子がないか確認していると「だめえーっ！」と3人のウマ娘から組み伏せられる。

「アダダダダダダッッッ
!!!」

「お兄ちゃんダメだよ！」

「ファル子との約束はどうなるの!？」

「ノー！　こんなサギに騙されてはいけませーん！」

痛いッ痛いッ死んじゃうッ！　あ、でも仄かにいい匂いと柔らかな膨らみが……ッ！　と本日二度目の幸福を味わっていると、パンツが見えそうなくらいの位置にエアグルーヴが立つ。

3人に組み伏せられてる方がマシだった。ウマ娘のパワーで首絞めはアカンて……片手だし本気じゃなかったにしてもアカンて……。まあ、これでセクハラと殺人未遂だし、俺の罪はかなり軽くなった方だ。訴えられても3日くらい反省したら済む話だぞ。頑張れ俺！

「それで理事長先程の話は本気なのですか？」

「無論ッ！ 冗談でこのようなことを言う乙女がいるか!？」

乙女だったのか……。てっきり話し方がアレだから、そっちよりだと思ってたわ。よく思い出したら初めに結婚って口にする時、めちやくちや恥ずかしそうにしてたわ。わー、顔を真っ赤にして可愛い。よし、結婚すつか！ チャンスは前髪しかない。だから掴んで離すなって聞いたことある！ 判子もない今、親指を切つて拇印で同意しようとする、突然理事長の扉が大きく開かれた。

「話は聞かせてもらったよ！」

現れたのは話がめんどくさくなるからとこの場に呼ばれていなかったであろうティエムオペラオーで、エアグルーヴは来てしまったかとあからさまに嫌そうな顔をした。

「トレーナーくんを辞めさせない方法についてはボクもシンキングを繰り返していた！ボクという太陽の輝きの虜にすれば、キミも考え直すのではないかと思っていた……。だがッ！ボクは自分の美しさに自惚れて簡単に考えていたようだ！」

なんの前触れも無く始まった寸劇に、慣れている俺以外は困り果てて眉尻を下げていた。

「キミの心を溶かすのは太陽じゃない！心を溶かせるのは心だけ！そう心だ！心が必要なのさ！」

「……そうなの？」

「いや、知らん」

カレンに訊かれて俺は即座にそう言い返した。

「つまり、どういうことだ」

説明しろと暗に言うエアグルーヴにテイエムオペラオーは肩にかかるほどでもない長さの髪を払うと、毅然とした態度で不敵に笑うとこういうことさとカレンやタイキシヤトルの間を通り抜けて、俺の前へとやってくる。

「キミたちは白雪姫という話を知っているかな？」

この世だかこの街だか、良くは知らないが鏡に対して、美しい女性を聞いたら飛び出してきた名前のお姫様だ。その名を聞いて、自分より美しい存在が許せない魔女が毒林檎を食わせて白雪姫を眠らせるのだが、眠った白雪姫を起こしたのは王子様のキスで、あとはハッピーエンドだったように思う。毒林檎の毒がキスで解呪されるのも変な話だが、毒林檎を食べて眠った女によくキスをしようと思っただと考えたこともあったが、あれは何故なんだろうか。

実際に読んだことのない話なのでかなりぎっくりしているが、こんなものだろうか。それがどうしたのかと首を傾げていると、首元の襟を掴まれる。

「あ、まさか」

「そのまさかさ」

やるなら役が逆ではないだろうかと思いつつも、主演が彼女で台本・演出も彼女の舞台に俺が口を出す術はなく、なんならこれから塞がれてしまうのだから余計に無理だと諦めた時、唇に想像していたような温かい感触はなかった。

おかしいなと目を開ければ、オペラオーに掴みかかるエアグルーヴの姿があった。

「キサマ、何をふざけたことをッ！」

「離れたまえ！　これはボクの劇だぞ！」

「訳の分からないことを言うなッ!!」

あらあらエアグルーヴさんたら会長が見てる前ではしたくないこと……。そういや、残りの3人は止めないかと思っっているとそれぞれが唇を抑えて赤い顔をしていて色々観察した。ピユアで助かった。ハグは良くてもキスはまだノーでよかった。

「……理事長なんでこいつら呼んだんすか？」

「否定ッ！ 呼んでない！ 呼んでないのに……。来たんだもん！」

そっか、それは……。仕方なかったってやつだなと俺は1人納得して喧嘩している2人の足元で踏んづけられてボロボロになっていく婚姻届を見て天井を仰いだ。

俺、結局どうなるの？

EX トレーナールームと有象無象

我が王との練習が終わり、私は今日の練習の成果をまとめるためにトレーナー室へと戻った。トレセン学園のトレーナー、全員分の机と椅子が用意されているこの部屋には、当然だがトレーナーしかない。トレセン学園歴代最強ウマ娘と言わしめるシンボリルドルフのトレーナーや、その後を追いかけるトウカイテイオーのトレーナーに、地方からの刺客・オグリキャップのトレーナーと、互いに顔や名前、担当ウマ娘を見知った者同士だ。

しかし、全てのトレーナーがここに集うことは非常に稀になる。例えば、ミホノブルボンのトレーナーは自宅の方が作業がしやすいからとこちらへやってくることは少ない。ヤエノムテキくんやサクラチヨノオーくんのトレーナーもここよりは宿舎の自室が落ち着くからと滅多に来ない。他にはトレーナーではなくモルモットになって薬物実験に付き合っているアグネスタキオンくんのトレーナーも最近見ていない。昨日虹色に発光していたので生きてはいるだろう。あとは、我が王の強敵・タイキシヤトルのトレーナーも、机や椅子は使われた形跡がない。にも関わらず、彼の机が汚れているのは、彼を快く思わない者がこの部屋には多くいるからだだろう。

「よお、キングの従者さん、今日もおつかれさん！」

「ああ、君こそ」

彼の机を眺めていると馴れ馴れしく肩を組んできたのは一昨年やってきたばかりでマーベラスサンデーに着いたトレーナーくんだ。入ったばかりの頃に何をすればいいのか困り果てていた彼に声をかけてから、私はこうして彼に懐かれている。キングの従者さんというのは、我が王のことを我が王と呼ぶからつけたあだ名のようなものだそうだ。私は気に入っているのだが、我が王はあまり快く思っていないらしい。我が王曰く、臣下にしてもらいなさいとの事だ。

「そーいや、あの人トレーナー辞めるらしいっすね」

「結婚するから、だそうだ」

相手も居ないのによく言えたものだと思うが、トレーナーをやめても無駄遣いしなけ

れば食いつぶぐれないほどには稼いでいるはずだ。彼としては問題ないのだろうが、トレンセン学園側からしたら迷惑な話だろう。急に言われては後任も決めなければならぬというのに。おまけにその後任決めも彼のせいで余計に手間がかかるというのに。

「結婚つすか！ いいつすね！ 相手は誰なんすか？」

「……それはキミが直接聞きたまえ」

「あー、いや、俺、あの人と話すのはマーベラスと勝つてからって決めてるんで！」

若手なら彼に対して嫌悪感や対抗心を持っている者は少ないか。まあ、話せばその印象は多少変わるだろうが、この様子だとマーベラスさんのトレーナーは悪い方向にはならないだろう。問題は、若手ではなく彼と同期かそれ以上の年齢のトレーナーか。

「やめとけよ若造。あんなウマ娘におんぶにだっこされてるようなトレーナーと話しても何の意味もねえぜ」

「そうよ。アレは彼がすごいんじゃない、彼が担当しているウマ娘たちがすごい」

「担当しているってよりは『されてる』と言った方が正しいけどな」

私たちの話を聞いて、やってきたのは彼を嫌うトレーナー連中だ。全員が全員、彼とそのウマ娘たちによって幾度も勝利を阻まれている。軽薄な表情と下卑た笑いで彼を愚弄するトレーナー達に口を挟む気にもなれなかった私は椅子に座り、ノートを広げると我が王の成長を記録していく。

「結婚するって言ってもあんなのと結婚したいって思うやつがいるのかよ」

「私は無理だわ。あんな万年仮眠室に引きこもってるような男」

「夏合宿じやいやらしい目で女を追いかけるようなやつだ。そんな奴が結婚できるわけねえよ」

「ほんと、ウマ娘たちが可哀想よ。カレンチャンとか、彼と一緒にいて不愉快にならない

のかしら?」

「ぼ、僕も、タイキシヤトルやスマートフルコンがまともに練習してもらえてなくて可哀想だと思います」

「それなー! てか、あいつが練習場に顔出してるの見たことねえよ」

出さなくてもいいけどと付け足された言葉に集まった有象無象たちが一斉に笑い声をあげる。我が王のことに集中していても、外野の耳障りな声というのは届いてしまうものだ。

「従者さん……」

「放っておきたまえ」

先輩方に色々と吹き込まれてそうなんすかと尋ねてきた彼に私はそれだけ言うてやる。

所詮は負け犬の遠吠えだ。あの中に彼のウマ娘に勝てたことのあるウマ娘を担当しているトレーナーは誰一人としていない。彼らは遠回しにこう言っているのだ。自分たちは練習を真面目に見ているというのに、ろくに見てもいないトレーナーに負けたのだ。それに関して腹立たしい気持ちは分かるが、彼はなんだかんだ言ってもウマ娘のことを好いている。

寂しがり屋のタイキシャトルくんは練習を共にするウマ娘がいなければ木陰の下から見守っているし、目立ちたがり屋のスマートファルコンくんの練習時には人集りができる時間を選ぶように指示している。カレンくんの練習に邪な気持ちを持って群がるファンには自ら野犬となつて吠えていたりもした。エアグルーヴくんにはスムーズに練習ができるようにと練習場の予約は5日前からしており、神出鬼没にして気まぐれなティエムオペラオーくんにはいつ気が向いてもいいようにしていた。

何故私がかここまで知っているかと聞かれれば、敵を知るために必要だったからというものもあるが、全ては彼のたつた1人の友人という者に聞いた話だ。確証はなかったが、見に行ってみれば事実だったのだから認めざるを得ない。

彼は決してトレーナーとして落ちぶれてはいない。そのことはウマ娘たちが証明してくれている。しかし人は愚かだから、見えない部分ではなく見える部分にしか目がいかなくなる。その部分が自分より劣っていると感じれば叩くのは当然だろう。しかも、

本人がいない場所となれば尚更なのかもしれない。私も何も知らなければあの場に混ざっていたのかもしれないと考えていると、まだ話は続いていたらしく、再び不快な笑い声がトレーナー室に響く。その後気分も盛り上がったところで飲みにも行かないかという話になっていた。

「はあ」

ここでは作業が出来ないな。それにこのまま残っていると、あの何の生産性もない飲み会に招待されてしまいそうだ。仕方ないから部屋を出ようと立ち上がると同時に、皇帝のトレーナーも私と同じように立ち上がった。

「あ、これから飲みに行くんだがアンタもどうだい？」

それに気づいたのか、集団の一人が彼へと声をかける。すると、彼は即座に首を振った。

「いや、遠慮しておこう」

言うとは彼は足早に部屋から出ていった。

「なんだよノリ悪いな」

「まあ仕方ないわよ。常勝シンボリドルドルフのトレーナーとなればやることも多いでしょ」

「マルゼンスキーも担当してるんだからすごいですよね」

しかし、彼が断つても文句を言う者は少なく、言つても人格否定にまでは繋がらない。彼もまた、あの男と同じくややコミュニケーションに難があるというのに。奴が大事なことは言わないのに余計なことを言う人間なら、彼は大事なことしか言わない男だ。故に必要なこと以外は口にしない。それであの2人を常勝とまで言わしめるほどにまで育て上げたのだから感服するしかないのだが。

さて、私もやんわりと断つて出ようと席から離れて扉まで来ると、唐突にそのドアが横へとスライドする。

「お、悪いなヒーローの」

「いえ」

珍しいなと思いつつ僕は入ってきた男へと道を譲る。入ってきたのは自宅作業が多いミホノブルボンくんのトレーナーだ。彼女から「マスター」と呼ばれている影響か、トレーナー間でもその呼び名が当たり前になっている。

「お、マスター珍しいな！」

「ちよつと必要なものがあつてな」

彼はそう言うのと自分の引き出しを開けて、取りに来たものをポケットにしまい込むとすぐさま部屋から出ようとするも、その背中に彼らが声をかけた。

「ちよいちよいマスター、今から飲みに行くんだけど、どうすつか？」

「すまんがブルボンに禁酒するように言われててな」

どうやらミホノブルボンさんに食事制限するように言い渡したところ、彼もまた好きなお酒を制限するようにと迫られたらしい。トレーナーとウマ娘の関係は様々だが、彼とミホノブルボンさんの関係は父娘のようだとつい微笑ましくなってしまう。

「こんなに集まってるのは飲み会のためか」

「そうなんすよ。マスターも禁酒じゃなければ来て欲しかったんすけどね」

就業時間を過ぎているにしては、多くトレーナーが残っていることに納得し、出ていこうとした彼は私の横に立つと、彼らには届かないような声で囁いた。

「大方、ろくでもない集まりだろ」

「……ええ」

首肯すると、彼はくだらないという表情で部屋から立ち去っていく。今度こそ、私も出ようとしたところで、後輩くんに見つかってしまったようだ。

「あ、従者さん！ どこ行くんすか！」

相変わらず空気が読めないなキミは。彼の声に反応して、有象無象の目がこちらへと集まる。

「おいおい、従者さんよ、どこ行くんだよ」

「お前も来るだろ飲み会。アイツに対して言いたいこともあるだろうしな」

いや、特にないが。あつたとしても、私は彼に直接言うようにしている。聞いているのかは分からないので、無駄な気もするがこの方が陰口を叩くよりはスッキリできる。

「私も遠慮させてもらおう。我が王の成長を記録しないとイケないのでね」

そう言つて部屋を出ようとしたところで、1人が口を開いた。

「そういえば、キングヘイローもあいつのウマ娘に負けてたよね」

「……それがどうかしたかね？」

「別に。なんとなく思い出したから言っただけなんだけど」

何か気に障ったかと首を傾げるその女に、私の頭に血が上る。しかし、ここで怒つては我が王の従者は大したことないと罵られるかもしれない。我が王に汚名や下世話な噂を流させるわけにはいかないとドアの凹みに手をかける。

「ちつ、なんでアイツに勝てねえんだろうな」

反応するな。

「もしかしてき、アイツのウマ娘みんなドーピングでもしてるんじゃないの?」

耳を傾けるな。

「そ、そうですよ! トレーナーが全然練習を見てもいないのに、おかしいですよ!」

早く行け。足を動かせ。

「あんなトレーナーに従うってことは、何かあるんだぜきつと!」

何も無いに決まっているだろう……! 彼らは純粋な努力で、勝利を掴み取っているんだ。ドーピングに我が王が負けただと? ふざけるな。そんな紛い物の勝利に手を出していたら、彼はとつくの昔にトレーナーをやめている。何より、彼らのウマ娘はみんな純粋だ。そして、正々堂々と勝負を挑む、アスリートだ。そんな彼女たちを馬鹿にするのは、この場にはない彼に代わって私が許さないと振り向いた時、大きな音を立て椅子を弾き飛ばして声を上げるものがいた。

「他人を妬んで、恨み節や何の証拠もないガセネタしか吐けないようなやつが勝てるわけがないだろう！」

メジロマックイーンさんのトレーナーは鬼気迫る顔でそう言うと、押し黙った彼らへと近づいた。

「汚い言葉を吐き、他者を愚弄し、そんなことでしか自分たちを慰められないのならお前がトレーナーを辞めてしまえ!! お前たちのようなクズに、ウマ娘たちを指導する資格はない!!」

一番声を張り上げて彼を罵倒していた男を見据え、彼を嘲笑った女性トレーナーを睨みつけ、ここぞとばかりに便乗して彼を貶した青年を視線で射る。

「羨んで妬んで、怨嗟の言葉を囁いても俺たちが負けたという事実は覆らない!! 何の価値もない食事会をしている暇があるのなら、少しは勝てるようにと対策を練るくらいしたらどうだ!?!」

普段は大声を出さないトレーナーのド正論に、先程まで水を得た魚のように口を開いていた彼らは顔を下へと向ける。

「……それと、あの机を汚したやつはすぐに片付けろ。じゃないと、お前たちが今まで彼にした行いや、言つた罵詈雑言を証拠も添えて全部ぶちまけるぞ!!」

最後に剣幕な表情でそう言つた彼は立ちすくんだ彼らを軽蔑するような目で見ると、そのまま荷物を持つてこの部屋から出ていく。私もそれに続こうとすると、先程の空気に嫌気が差していた者たちが続々と席から立ち上がる。どうやら全員が全員、彼を嫌っているというわけではないらしい。まあ、敵意は向けられているようだが。それは仕方ないことだ。勝つて逃げるなんて許さないと、彼に雪辱を果たそうと闘志を燃やしているのだから。

⑨バカなりの意地

理事長室での話し合いは暴走したティエムオペラオーとそれを止めるエアグルーヴによつてお開きとなり、後日再び集まるということで落ち着いた。たづなさんが理事長と会長、俺以外を連れ出して、また改めて連絡するという運びになった。

理事長とはメールのやり取りしかなかったがこの度、メッセージアプリのアカウントを交換した。さすがにメッセージでもあのような話し方ではなく、シンプルなメッセージばかりだ。ちなみにやよいという名前は今初めて知った。ずっと理事長と呼んでいたからな。これからはやよいって呼んだ方がいいのかしら。

アカウントの交換と今後についての簡単な打ち合わせのみを済ませて理事長室を出ると、すっかり日は暮れており、校舎を出て、もはや俺専用と化した仮眠室へと向かう。しかし、まさか理事長から結婚の申し出があるとは、かなり動揺してしまつて後先考えずにサインするところだった。そのせいでカレンたちに4の字固めを喰らい、さらにはエアグルーヴから首に指圧を加えられて本格的に身体がボロボロだ。

それでも、どうにかこうにか歩いて仮眠室のある小さな建物が視認できるところまでやってくる。やったあ、あと少しだあと足取りが軽くなつた気がする。その時だ。仮眠

室の前に会長と共に生徒会室へと戻ったはずのエアグルーヴの姿を見つけてしまった。

立ち止まって、木の後ろへと隠れると、彼女は前髪を弄っては躊躇うように、その場を歩きつ帰りつしながらウロウロとしていた。ウロウロとウホウホってなんか似てるよね。今のエアグルーヴは面倒見がよい、普段の颯爽とした姿とはだいぶ乖離して見える。

5分くらい見ても、エアグルーヴは同じ場所を行ったり来たりしており、中々離れる気配がない。誰かを待っているのだとしたら、それは仮眠室を利用するものだけなのだが、ココ最近の利用者は俺一人だけだ。オマケにエアグルーヴは俺の担当ウマ娘。つまり、自然と答えは導き出される。

「何してんのお前」

「……やっと来たか」

無視して何かしら可愛い反応を引き出すのも面白そうだったが、昨日の今日で彼女も心労が溜まっているだろうと気が引けて、俺はいつものように声をかけた。エアグルーヴは俺が来たことに声で気づくと低めのトーンで答えた。

「キサマなんなのだ？ たわけか？ ああ、たわけだったな」

先程のことを言っているのかエアグルーヴの口からは文句しか出ない。というか、俺の話になるとコイツはいつも文句ばかりだ。しかし、俺に対する悪口は愛情の裏返しつてな。俺は詳しいんだ。

「キサマ、いつの間に彼女たちに手を出していた？ 互いに合意があつたとしても犯罪だぞ。それで私には手を出していないというのはどういう見だ」

「落ち着け落ち着け。誰にも出してないから」

「本当か？ キサマの事だ、口八丁で純粋なカレンたちを騙して……！」

俺って信用ないのん……？ そこまで言うなら俺が誰にも手を出してないことを証明してやるぜとパンツを脱いでもいいのだが、残念ながら何の証明にもならないし、正式にトレーナーを辞める前に社会人を辞めることになる。

「まあ、キサマにそんな度胸はないだろうが」

「分かつてるならこれ以上責めないでね」

エアグルーヴが呆れたようにして大きくため息を吐く。それに俺は苦笑すると、親指で仮眠室を指さした。立ち話もなんだから中に入らないかと暗に伝えると、その意思是伝わったのか彼女は首肯する。

「相変わらず、ろくなものがないな」

「まあ寝て起きて歯を磨くだけのところだからな」

仮眠室の中をぐるりと見渡して、以前来た時と変わっていない様子にエアグルーヴは乱れたシーツやらを正してから簡易ベッドに腰を下ろした。

「それで、どうするんだ？ まさか理事長からの申し出を受ける気じゃないだろうな」

「……ダメ？」

可愛いらしくきやるん☆とカレンやファル子が俺に物や飯をねだる時にやる顔をして見ると、エアグルーヴはポケットからスマホを取り出して1を2回、0を1回押し
てこちらに向けた。

「そうか、ならこれでお別れだな」

「アアツ!? チョットマツテ!! 冗談! やだなーもー! エアちゃん空気読んでよ
っ!」

俺が焦って捲し立てると彼女は舌打ちして、スマホをポケットにしまった。あの、
きたら電話画面消してからしまっただけで欲しいんですけど。しかし、そんなお願いは通じな
いのかエアグルーヴは肩を竦めた。

「……アレは理事長が言い出したことだ。キサマが本当にアレでいいのなら、私に止め

る義理はない」

その口ぶりはエアグルーヴ本人は納得していないといった様子だった。

「エアグルーヴはどうなんだ。俺が辞めるのと、辞めないの、どっちがいい？」

聞いてなかったよなと確認すると、彼女は躊躇するような薄いため息の後にポツリと呟いた。

「……そうだな、私としてはキサマに辞められると些か困る」

俯きがちなせいで、表情はよく伺えなかったが、それでも消え入りそうな声には哀しげな響きがあった。

「新しいトレーナーが決まるまでレースには出られないし、決まったとしても以前のように私のやりたいことに異を唱える奴につかれるのは面倒だ。……そういう意味では、キサマに居てもらった方が、私は助かる」

俺の前に付いていたエアグルーヴのトレーナーは彼女が行う生徒会活動や後輩育成を無駄なものとして切り捨てた。それがエアグルーヴの逆鱗に触れて解雇されたと聞いた。1人ではなく、3人ほど続いたとたまたまその場にいたアマゾンに聞き、それから放任主義の俺であれば合うのではないかと交渉を持ちかけた。その時にトレーナーとしての実力を見ると色々と難題をふっかけられたが、優秀なウマ娘に稼いでもらうためだからと全てこなすと、彼女は俺をトレーナーとして認めて、俺たちは契約を結んだ。

「……キサマは、どうなんだ」

昔のことを思い出していると、彼女が唇を浅く噛むのが見えた。

「あそこまでして口説いた私を、結婚したいからという理由で、見捨てるのか？」

声音は責めるように震えて、眼差しは俺だけを捉えていた。きつと、誰かに言われるのだろうとは思っていた。その相手がエアグルーヴだというものも。

「確かに俺はお前が必要だと言った。お前がレースに出て勝つためなら、望むもの全てを用意してやると」

それも賞金のため特別賞与のため。俺は彼女たちの知らないところで、彼女たちを利用してきた。純粹無垢で、健気に努力する彼女たちを金稼ぎの道具のように。そのためならやれることは全部やったし、どんなに嫌なことでも勝つためならとやってきた。そうするうちに、彼女たちに愛着というか、何がなんでも勝つてほしいとか、ずっと笑顔でいて欲しいとか、そんな気持ち湧いてきた。これがトレーナーの心と理解するのにそう時間はかからなかった。

しかし、いずれ別れる日が来ると思うと怖くなった。俺たちはずっと一緒にいられるわけではない。時が来れば、彼女たちは学園から出て、まだ見ぬ強敵と足で競い合うかもしれない。ファル子のように競走バとは別の道を目指すやつもいるだろう。そうなった時に俺は彼女たちの傍には居られない。だから、そうなる前に俺は逃げようとしたのかもしれない。

「でも、トレセンにいて、色んな人やウマを見ていて思った。それは俺じゃなくてもできるって」

これは逃げだ。彼女たちを傷つけないためにという建前で、俺が傷つかないように逃げようとしている。

上手く出てきた言い訳に、エアグルーヴは不可解そうな眼差しを俺に向け、今にも掴みかかってきそうな勢いで立ち上がる。

「キサマ……ッ！」

ああ、これは殴られるなど俺は目を閉じた。幸い、ここには監視カメラとか別の人やウマの目はないから、俺が多少怪我を負ったところでエアグルーヴに非はない。顔の腫れくらい積み上げていた優勝トロフィーが倒れてきただけと言えば済む話だろう。

しかし、想定していた痛みは来ず、代わりに胸倉にストーンと拳が入った。

「……どうして、どうして、そんな簡単に、嘘がつける……ッ！ わ、私は……っ、キサマが……っ、貴方が……ッ！」

距離を詰めて俺の胸へと額を付けたエアグルーヴは肩を震わせて、何度も、何度も、何

度も、何度も、胸元をか弱い力で叩いてくる。まったく痛くないのに、骨の内側にある心臓にはどうにも痛みが来て、俺はあやす様にエアグルーヴの頭を撫でた。バカ、バカと普段口にされてもなんでもない言葉が、今日はやけに身に染みだ。

「……確かにバカ野郎かもな」

今ならジャステイスを自爆されても文句は言えまい。このバカ野郎ってな。

しかし、俺はまだ終われない。結婚もしてないし、こいつらの花道もまだ用意できていないのだ。

バカにはバカなりの意地ってやつがあるのだ。持つてても、誰かにあげてもなんの価値も無いくだらない意地だが、こういうのを男たちはこう言うのだ。男の意地ってな。

⑩その選択を悔やまないために。

はてさて、男の意地とは言ってみたものの具体的に何をすればいいのか分からない。僕には26通りの解決方法があると思っただけど実はそんなこと無かつたぜって感じだ。どんな感じだよ。

セルフボケとセルフツツコミを合わせても、男の意地ってものの証明にはならない。なつていいはずがない。やよいさんの覚悟にエアグルーヴの涙を見て、どうするべきか分からなくなる。こんなだから障害者予備軍だとか、なんだかんだ言い訳して逃げるだけのチキンだとか陰口を言われてしまうのだ。陰口は本人の聞こえないところで言おうね！

現状を確認するため、そして冷静になるために学園内にある自販機の前に立つ。コインを入れて、何の変哲もないただの水を買う。考える時に糖分が必要だと聞いたことがある。しかし、思考をクリアにするにはやはり水だ。二日酔いの時とか、夜寝れない時とかいつも俺を救ってくれたのはいつもこいつだった。

買ったばかりで冷たく無味無臭の水を体内に取り込みながら、俺は昼間のことを思い出す。

#

3度目のやよいさんとの話し合いは、以前のようなゴタゴタや乱入を防ぐためにウマ娘たちが授業をしている間に行われた。

まず、初めに前回取り乱して冷静ではないことをしてしまったとやよいさんが謝罪したところから話は始まった。あの話は俺にとっては渡りに船だったが、家の問題などが絡んでくるからと白紙にされてしまった。些か残念に思ったが、あのままトントン拍子で結婚が決まるとも思えないし、いざ決まったとなっても理事長とトレーナーという間柄でしか互いのことは知らないため、結婚生活中に不和が生じる可能性も否定できない。

続いて本題へと入った。俺が結婚したいから辞めるといっているのであれば、結婚相手は学園側で用意するという話だった。大変異例の措置だったとやよいさんは語っていたが、トレーナーの中に本当に結婚するから辞めるといふ者はいたが、したいからという理由は俺が初めてだったから仕方ないことだと彼女は優しく語っていた。

申し訳ないと思いつつも、学園側で相手を用意してくれるのなら、俺の辞める理由は自然と消滅する。相手は全てURA関係者で、俺の職業柄の問題にも理解を示してくれ

るだろう。俺の懸念事項はほぼ全て解消される。

問題は顔とか性格の合う合わない、俺が家事全般をする代わりに外では働かないことを了承してくれるかだ。これが合致すれば問題ないのだが、たづなさんはどうやら問題ありのようだった。

「辞めさせないために結婚相手を紹介するのに、結局辞められたら意味ないじゃないですか!？」

「いや、でも働きたくないですし……」

「はあ!?! 人生舐めてるんですか!?!」

めちやくちや怒られた。そりやそうだ。しかし、人生は舐めてない。むしろ、6年働いてお金のありがたみを理解したところだ。俺が湯水の如く使っていた生活費を親父や母ちゃん俺よりも悪い労働環境で稼いでたんだと考えると、給料の1割を仕送りに出さずにはいられなくなった。しかし、働くのを辞めるとそれも出来なくなるのが大変お辛いところだ。そこは孫の顔を見せるといってお金には変えられないもので親孝行し

ようと岡山の両親の顔を思い出していると、やけに静かなやよいさんへとたづなさんが声を荒らげた。

「理事長も何か言ってください！」

「……質問。トレーナーを辞めて、結婚してどうするのだ？」

「働く妻のために家庭の細々とした家事から近所付き合いまでこなすつもりです」

「それ、結局働いていないか？」

へ？ やよいさんに言われて俺はピシリと固まった。

「働くとは何も金銭が発生することだけを言うのではない。家庭で家事をする専業主婦も立派な職業だ。家庭や近所という社会で人と付き合っていくのだから」

確かに言われてみればと俺は逡巡した。家事を代わりにするっていう家事代行って

職業があるくらいだし。家事も仕事とするならば、俺は結局働くことになってしまふのだ。

「通告ッ！ 君の辞表はまだ受理していないッ！ あとは君の自由意志だ！」

「自由、意志？」

「そうだ！ 君が本当に辞めて、働きたくないと言うのならそれも結構ッ！ 君の人生だ！ もう止めはしないッ！ だが、もし！ これからもウマ娘たちを支えたい！ ウマ娘のファン達を熱狂させたい！ 彼らと喜びを分かち合いたいのならッ！ その時はこの辞表は破棄しようッ！」

あとは俺が決めるのと理事長は1週間待つと言った。それまでに決めろと。決まらぬのなら、当初通り辞めて好きにすればいいとの事だった。要は彼女は1週間あつても決められないのならば、辞めてしまえとそう言うわけだ。

「私は引き止めた！ ウマ娘たちも君に気持ちを吐露したはずだ！ それでもここに留

まる理由が見つからないのならば！ 私からもう言うことは無いッ！」

その言葉を最後に理事長室をあとにした俺はこうして自販機の水で頭を冷やしつつ、昨日のエアグルーブのこと、それより前にカレンやファル子、タイキにオペラオーが俺に言ったことを振り返る。

全員が全員、俺を必要としていたように思う。それがトレーナーとしてなのか、一人の男としてなのかは計り知れない。理事長やたづなさんが俺を引き留めたのも単純な好意か、あるいは他の要因かもしれない。それでも必要とされているのなら俺は残るべきなのだろう。

俺に出来ることは限られている。誰かを幸せにしたりもできないし、人生全てを捧げられる価値もない男だ。そんな男が取る選択肢は限られてくる。

「どうやら悩み事のようにだね」

深いため息と共にやってきたのは、キングヘイローのトレーナーだった。やけに爽やかで涼し気な顔をしたその女は、座る俺を見下ろすようにして口を開いた。

「理事長と何やら揉めたそうだね。君を嫌う野次馬たちが噂をしていたよ」

「ははっ。アンタも俺の事嫌ってそうだけどな」

話が早いなと思うと同時に、余計な一言まで添えてきたそいつに思わず辛口になってしまう。だが、女は俺の言葉に表情を変えずに言った。

「そうだね。このまま逃げ出すというのなら、私は君のことを心底軽蔑するだろうね」

ということは、まだ嫌いじゃないってことか？ いや、軽蔑するだけで嫌いとは言っていない。しかし、こうしてわざわざ話しかけてくるあたり実は俺の事好きなのでは？ 彼氏とか募集してないかしら。

「軽蔑してくれて結構。他人の期待を裏切るのには慣れてるからな」

「だろうね。けど、君を慕う者の期待は裏切らないことだ」

彼女は呆れたようにふすつと短い溜息をつくど、一転して嫌な顔を向けてくる。

「今誰とも向き合わずに逃げたら君は一生後悔するよ」

言われて俺の顔から薄い笑顔が消えたのが自分で理解出来た。しかし、それでも反論を口にするのは悪い癖だろう。

「……後悔しない選択なんてないだろ」

「いやあるよ。実際、私は我が王のトレーナーになれて本当に良かったと思っている」

今度は反論すら許さない上に、適当な返事すらできなかった。

「確かに彼女は重賞での勝利に恵まれていない。それは彼女のせいではない。トレーナーとして私が不甲斐ないからだ。私の力不足を呪ったことはあれど、私は彼女を選んだことは後悔していないよ」

彼女の言葉に俺は持っていたペットボトルを落としそうになる。しかし、中に入った水が零れる前に再び手に取り顔を上げると、肩を竦める彼女の姿が目に入った。

「私は言いたいことは言った。あとは君が決めたまえ」

またそれかと俺は言いそうになつたが、唇をキュツと噛んで言葉を押し殺した。多分アイツの言ったことは俺をライバル視しているトレーナーたちの総意だ。勝ち逃げなんて許さないと、俺を敵視するトレーナーの中に紛れて、俺のウマ娘を1位から引きずり下ろそうとするやつらが居るのはオペラオーやエアグルーヴから聞いていた。

会長のトレーナーも、マスターも、メジロ家専属トレーナーも、言葉は交わさなくてもその目が俺に告げていたのだ。俺はそれを見ないようにしてきた。けれど、そうもしてられないと気付いてしまった。

きつと、この空の下で誰も、が弱さを抱えている。

カレンのみんなによく見られたいというのは、自己満足のためだけでは無い。俺と同じで誰かに必要とされたい。誰かの笑顔になりたいという思いから来る承認欲求だ。

ファル子のウマドルになりたいという夢はカレンと通ずるものがある。ウマドルの活動を通して、ファンのみんなを幸せにしたい、笑顔にしたい。しかし、芝ではなく砂

の上を走る自分には出来ないと思っていた時期もあった。

エアグルーヴも清く正しく美しくあろうとするのは、弱い自分を隠すためだ。母親想いで優しい彼女でも、傷つくことはあるし、泣く時は泣くのだ。

タイキシヤトルは外国から来た故に人の温もりに飢えている。いつも元気でハツラツとしているが、ひとりぼっちになるのを恐れる寂しがり屋だ。

そして、オペラオーも心のどこかに影がある。自身を最高と評しながらも練習をこなすのは最高であるためだろう。その努力は弱さでは無い。自信に見合った練習をこなすのは大切なことだ。だが、最高を目指すのは彼女にも恐れる何かがあるからでは無いかと俺は思う。

人とウマ娘の間に絆が生まれた時、科学や理論では証明できない力が生じるのは、俺たちが一人で生きていかないためなのだろうと考えたやつがいた。それは人間も同じことで、大なり小なり悩みを抱えているのは、共に助け合い支え合うためだからだとも言っていた。

「俺のしたいこと。本当の俺の願い」

自分にも分からないし、他人では尚更な疑問だ。答えのない問題ほど厄介なものはない。明確な答えが存在する学校の5教科テストの方が遥かにマシに見えてくる。

楽しんで生きたいとか面倒なことからは逃れたいと言いつつも6年もトレーナーをやってきたのは何故だ。

俺はその答えを求めて、俺が唯一、心の底から頼ることができる友のもとへと歩き出した。

⑪これは俺が始めた物語

こんな俺にも友人と呼んでも差支えない人物がいる。友達の定義は分からないが、互いに友人と認め合えていることから、俺と彼の関係は友人と呼んでも問題ないだろう。ないよね？ いちいち確認とつてないけど。一緒に遊びに行つたし、ご飯も食べたし、ワンナイトカーニバルお泊り会もしたし。こんなのただの知り合いとはできないよね。俺はできない。

そんな彼に出会うのは、1ヶ月ぶりくらいだろうか。彼と出会つたのはそう、まだトレーナーという働かなくても収入があるという話を信じていた無垢な頃。桜は散り始めてもなお、美しく咲き誇つていた頃の話。

などと大仰に語り始めてみたが、その実大した出会いではない。むしろ、実に些細で些末で些事そのものなだ。俺と同期で、他が女性ばかりの中、唯一俺と同性だった。だから、そいつと知り合うのにも仲良くなるのにも然程、時間はかからなかった。

しかし、そいつは3年前にトレーナーをやめてしまった。そして、そいつは今。

「あ〜ら〜、いらつしや〜い」

オネエになつて夜のバーの店長になつていた。

「……いつもの」

「は〜い！ チェリーサワーね！」

いちいち言わなくてよろしいと思いつつも声に出さずに俺は無言で席につく。店内を見渡しながらかつて待っていると、コースターの上に頼んだチェリーサワーが入ったグラスが置かれる。

「で、今日はどうしたの？ 女の娘に振られちゃった？」

「告つてないから振られねえよ」

たまに告つてもないのに振ってくるやついるけどね。俺の愛バにそんな男心を抉り取るやつはいない。……まあ、全員しそうだけどね！

「まあ、ちよつと相談が……」

「ん、聞いてあげる」

頬に手をつけながら聞く姿勢をとった友人に俺は今抱えている悩みを打ち明ける。結婚したいからトレーナーを辞めるということ。だが、その相手をトレセン学園が用意してくれること。またウマ娘達は辞めて欲しくないということ。あとは、結婚相手が決まっても働きたくはないこととか。通りいっぺんの話をする、そいつは話を整理するために何回か頷いた。

「知らないわよそんなの」

「ええ……」

「だって私は結婚願望ないし、辞めたことに後悔はないんだもの」

もちろん、トレセン上層部との拗れもないとそいつは言つてのける。確かにこいつが辞める時に誰かと揉めたとか聞いたことねえな。担当してたウマ娘も少なかつたし。多い俺が異常なのかもしれないが、トレーナーの中にはチームを率いてるやつもいるから千差万別なんだろう。

「親父さんの店だっけ」

「正確にはおじいちゃんね」

こいつがトレーナーを辞めた理由はこの店を継ぐためつてのが表向きだが、実際の理由は何も知らない。店の話は噂で聞いた程度で、後から招待されたから間違いでないのだろう。でも、他にも理由がありそうだと思う。けど、理事長とも揉めず、担当ウマ娘とも後腐れがなかったのなら何も言うことはない。

しかし、辞めた後にまさかオネエになっているとは誰も思うまい。そういう店でもないのでどうして……。だが、話し方が変わつても本質は昔のままだ。知らないと言いつつも彼は言葉を紡いでくれる。

「辞めたいなら好きにしなさいよ。でも、まだそのバッジを付けてるのは心のどこかで辞めたくないって思ってるからじゃないの？」

言われて俺は襟元につけたバッジに触れる。そういえばここについてたんだっけかと、服と共に洗濯されて些か輝きを失い、錆びてしまったバッジはまるで俺のようだと
思わざるを得ない。

「分からない。けど、俺が辞めるとあいつらが悲しんだりするなら……その、辞めるべきじゃないとは、思う」

多分、他の人には言えないし、言わない。自分の内面を晒すことは弱味を見せることだ。己の弱さを晒すことは俺には耐えられない。臆病な自尊心がそうさせるのではなく、尊大な羞恥心が言葉や行動という鎧で俺の弱さを隠すのだ。

けれど、対等で、俺の敵にはならないこいつになら話すことが出来る。なぜなら、こいつは俺が見せた涙も、弱音も全部知っているからだ。それは俺も同じことだ。こいつの弱さを俺は知っている。互いに弱味を他人に突きつけないし、脅しにも使わない。弄りはしても、それは2人きりの時だけだ。だからこそ信頼できるし、信用もできる。

「そう。案外、あの娘たちのことにいれ込んでるのね。私と一緒に！」

急につついてきては、俺が身を引くと頬を膨らませるのはあまり好ましくないが、別にいいだろう。

「貴方は誰かのために頑張れるすごい人よ。自信は……持つとバカになるから、心の中で誇りに思いなさい」

「お、おう」

「今まで頑張れたのも、あの娘たちがいたからでしょ？ だったら、これからも頑張れるんじゃないの？」

「いや……」

それもあと数年だ。彼女達は学生だ。学生には卒業というものが待っている。学校

という小さな社会から飛び出して、自分とは違う人間やウマ娘が多くいる大きな社会へと飛び出していく。最初に担当したウマ娘はとつくに巣立って行ったが、彼女が居なくなつてから心に空いた穴は大きかった。

「貴方は本当に可哀想ね」

知らないうちに胸を抑えていると、それを見兼ねた彼は哀れなものを見るような目のため息をついた。視線で何がだと問えば、彼は答えてくれた。

「自分の中に答えはあるのに、それを出す方法が分からない。だから、近いものを他人に委ねては、そこにあてはめようとしてるだけなんじゃないの？」

言われて腑に落ちる。結婚したいと望んだのは何故だ。働きたくないという真理が先か。彼女たちが巣立つのを見る前に逃げるためか。あるいは彼女たちが他のウマ娘たちに負けて悔しがる姿を見たくないからか。

口では働きたくないから結婚して家庭に入ると言ったのは、明確な理由と行動指針を口にしていれば、誰もが納得してくれると思つたからではないか。自分も含めて。無理

やり納得させるために、大多数が望むであろう結婚というゴールを掲げて逃げようとしていただけではないだろうか。まあ、結局はこの稚拙な逃げも、優秀な頭脳を持つもの達には見破られてしまったわけだが。

「やり方は一つじゃないわ。トレーナーを辞めて結婚するのもいいと思うわ。相手が見つかるとかは別問題として」

言いながら、彼はカウンターに置いてあったメモにペンで書き付け始める。

「このままトレーナーを続けるのもいいわね。それだと貴方以外は納得するし喜ぶわ。いっそ、みんなと結婚しちゃうのも手ね」

「それはちよつと……」

貯蓄的に1人か2人くらいならなんとかなるかもしれないが、さすがに全員となると難しいと声を出すも、彼は聞いていないのか、言葉を更に書き記していく。

「この中に貴方も他のみんなも後悔しない選択肢がないとしたら、作ればいいのよ」

「それが出来たら、苦労してねえよ……」

「そう？　方法はいくらでもあると思うけど」

1人を選ぶのもよし、誰も選ばないのも手だと彼は書いていく。そして、メモは一面に様々な方法が書かれるも、それをくしゃくしゃと丸めると俺の前に落とす。

「やよいの言う通り、決めるのは貴方よ。だから、今私がやったことは、貴方がやるべきなのよ」

開けた視界の先にはたった1人の友人が俺を見据えていた。

「じゃないと、カレンやファル子ちゃん、オペラちゃんにタイキちゃん、グルーヴちゃんは納得できない。なにより、他の誰でもない貴方が納得しないでしょ」

「俺、が……」

脱力して眩くと、彼は俺のチェリーサワーを奪い取って飲み干すとふつと笑った。

「だから、やりたいようにやりなさい。しない後悔より、やって後悔、でしょうが」

「……ああ、そうだな」

その笑みに俺の強ばりも解かれて、緩い笑いなら浮かべることが出来た。

「やりたいようにやってみるわ。それが理解されるかは別として」

「大丈夫よ。貴方、昔から理解も共感もされてないもの」

「ひでえなおい。反論できないあたり俺も酷いな」

「そうそう。だから気負わずにね」

どんなに無様で気持ち悪くて惨めで愚かしくて嘆かわしくても、最低最悪かつどうしようもなく情けなくても、俺自身で答えを見つけないならならぬ。答えは得てない。けれど、その答えに辿り着くための灯りは照らしてもらった。

大仰で誰にでも思いつきそうな普遍的な終わり方でもいい、惨たらしく目が当てられない終わり方でもいい、取り返しがつかないくらいにふざけた結末でも構わない。

俺が始めた物語を終わらせるのは——俺しかいない。

⑫ トレーナー辞めて結婚できましたか？

多重関係という言葉がある。専門家と、とある目的以外の明確・意図的な役割を持つている状況、つまりは妻がいるのに会社の後輩と肉体的だとか恋愛的な関係つてのがわかりやすいだろうか。

トレーナーにとつて、ウマ娘つていうのは言うなれば教え子だ。彼女たちを勝利に導くために俺たちにはいるのであって、彼女たちと恋人になつたりだとか、結婚したいという願望があつてやつていゝるやつも、探せばいるのだろうが、倫理的にはNGだ。

そもそも、彼女たちは学生でトレーナーは社会的にも肉体的にも立派な大人だ。日本の法律では人間だろうがウマ娘だろうが、親権者及び本人の同意なく恋人関係になることはご法度とされている。

じゃあ、親や世間に文句が言えない年齢になつて、互いの合意もあつて、法律的に許されれば問題ないのだろうと言つたのは誰だったか。そう、テレビの向こう側で今日も元気にオペラ歌手並みの美声を出しながら劇を進める舞台女優となつたティエムオペラオーだ。

「ワオ！ 今日もオペラは劇団オーデスね！」

俺の太ももの上に現役を退いてもなおハリのあるおしりを置いては、訳の分からない日本語を口に行っているのは、左手の薬指に銀色に輝く指輪をはめたタイキシヤトルだ。

「でも、今は私の時間、デース！」

寂しがり屋な女の子は、涙を見せなくてはなつたがその分過激なスキンシップが多く、ここが日本だということをよく忘れているように思う。俺は長男だから耐えられるけど次男だったら耐えられないダイナマイトボディが俺の身体へと密着する。

「ええい、こんな昼間から何をしているこのたわけ共」

人間の力でウマ娘に勝てるわけが無いのでされるがまま、この身は全て時の流れに任せようと諦観していると、タイキシヤトルの身体が引き剥がされる。妙にエプロン姿が板についてきたエアグリーブは腕を組みながら呆れたようにして息を吐いた。

「タイキ、じゃれ合うのはいいが時間と場所を考えるとあれほど言っているだろう」

「うう、ソーリく。オペラオーにシットしてしまいマシタ……」

学園の頃からエアグルーヴには頭の上がないタイキシヤトルはしよぼんとした表情と共に耳としつぽを垂らす。まだイントネーションにやや違和感はあれど、多くの日本語を使えるようになったタイキに感心していると、エアグルーヴの睨みがこちらへと向けられた。

「貴様も貴様だこのたわけ！ 何をだらしなく鼻の下を伸ばしているのだ！」

「俺はだらしなくはあるが、鼻の下は伸ばしてないぞ！」

「開き直るな！」

エアグルーヴの叱責を受けてやる気を落としていると、騒ぎを聞いてか2階から降りてきたカレンが欠伸をしながらこちらへと歩いてくる。

「もう、昼間から何騒いでるの……?」

「カレン」そんな時間まで居眠りとは。たるんでいるぞ」

カレンは昨日はファッション誌の取材があつて帰りも遅かつたし多少は大目に見てあげて欲しい。ウマスタグラマーとして、そして短距離の女王として名を馳せたカレンチャンは、現役でスプリンターを続けながら、ゴールドシチーのようにモデルとしても人気を博している。ちなみにトレーナー兼マネージャーは俺であり、不埒な下心を抱く不屈き者に対してはレーザーポインターを浴びせる毎日だ。おかげで今日も俺の目はカラカラである。

「もうみんな喧嘩しないの！ 今日笑顔で頑張つていこ〜!」

エアグルーヴとカレンの一触即発の雰囲気キラキラスマイルが飛び込んだ。ウマドルとして磨かれた芸術点高め笑顔とコールをするスマートファルコンに俺のヲタ声木霊する。

「イエーイ！」

「イエーイ！」

俺に合わせてタイキもまたレスポンスを返すと、ファル子が「ありがとう！」と椅子の上に立って手を振ってくれる。

「ねえ、今カレンと目が合ったよ！」

「いや、今のは俺だ。間違いないね」

「ノー！ 2人じゃないデス！」

椅子の上に乗るなどという注意と、ファル子のノリに合わせる俺たちのどちらから口に出せばいいかと額に手を当てるエアグルーブに次なる災難が降りかかる。

「おいおいみんな、今はボクの劇を見る時間だろう？」

机の上に立ち、天上下唯我独尊といった風に微笑むテイエムオペラオーにエアグルーヴはあため息をついた。

「全く、どうして貴様の担当はこう問題児ばかりなのだ……」

その中にてめーも加えてやろうって言うんだよ！ みんながみんな、問題児になれば問題なんて何も無いよね！ と言ってみたものの、エアグルーヴの問題点といえばギャグセンスがないが故にギャグを理解できないところだろうか。端的に言えば笑いのセンスというのが欠けているのだ。だから、俺の見えないところで皇帝さんにテンションを下げられてしまうのだ。

「エアグルーヴが真面目すぎるんだよ」

「もつとソフトになりまショウ！」

「ファル子もそう思うー！」

「うっ……！」

あ、またエアグルーヴのテンションが。しかし、ここはみんなの王子様を自負するウマ娘、テイエムオペラオー。すかさず、机から降り立つと落ち込む淑女の肩に手を添えた。

「美しい顔が台無しだよ、エアグルーヴ」

「オペラオー……」

「まあボクの顔の方が煌めいていて、一層美しいがね！」

ハーハッハッハッと上機嫌に、余計な一言を添えて笑う王子様なんてオラ嫌だ。ロンドン行くよ。

「はあ、落ち込むのもアホらしくなってきた」

肩を落とすエアグルーヴに、カレンやタイキが寄ると励ますようにして言葉を紡ぐ。その間にも自我の強いオペラオーとファル子は劇団ひとりとゲリラライブを敢行するのだが、この景色が見られることを俺は嬉しく思う。

トレーナーを辞めるか続けるかという選択を強いられた時、俺は理事長に向けてこう言った。

「こいつらが引退するまではトレーナーを続けます」

つまりはトレセン学園にエアグルーヴ、タイキシヤトル、カレンチャン、ティエムオペラオー、スマートファルコンがいる限りはトレーナーをやり、新年度になっても新しいウマ娘を担当することはなく、彼女たちが卒業すると同時に俺もトレーナーという職から離れるという決断を下した。

きっかけはエアグルーヴの言葉から始まり、オペラオーの待っているという発言があつてからだが、全て自分が決めたことだと俺は胸を張って、誕生日会のお誘いの手紙の入った封筒を破いたようなスッキリとした顔で己の書いた辞表をその場で破り捨て

た。

そして、現在カレンが卒業してから2年。俺が貯めたお金で土地を買い、家を建て、5人のウマ娘たちと共に同じ屋根の下で暮らしている。法律上結婚はできないため、彼女たちと家族になることはできないと思っていたのだが、妙に弁舌に優れた御仁からの助言で、法制度を上手く利用して養子という形ではあるが家族になることができている。彼女達の指にはそれぞれ色もついた宝石も異なる指輪が輝いている。

人の身である俺よりも身体能力や容姿に優れた彼女たちにはいつも振り回されており、当初の目的であった仕事をせざるに暮らすという俺の野望は砕け散ったものの、今の生活に不満はない。唯一、あげるとするならば、

「何を笑っている」

「ふふ、そうか、君も楽しいよね」

「今日はみんなでレッツエンジョーイ！」

「フアル子もー！」

「じゃあ、ウマスタに投稿しよー！」

俺の愛バが尊くて生きるしかない。つてところだろうか。

死にたいと思つたことはないが、生きねばと思つたのはこいつらがいたからだ。だから、毎日彼女たちには言わねばならない言葉がある。

「ありがとう」

— f i n —